別添

事業報告書（詳細）

事業 ID	2023007837
事業名	海の学びミュージアムサポート
団体名	公益財団法人　日本海事科学振興財団
代表者名	会長　前田　晃
事業期間	2023 年 4 月 1 日～2024 年 9 月 30 日
事業完了日	2024 年 9 月 30 日
事業費決算額	133,912,182 円

事業内容：

全国の博物館を中心とした社会教育施設を対象に、様々な地域、色々なジャンルをテーマにした各種博物館活動から「海洋」に関する生涯学習の場を広げ、国民の理解増進を図る事を目的に実施した。
社会教育の分野から海洋に関する一般国民の理解増進を図るため、全国の博物館・水族館・美術館等社会教育施設で開催するプログラム 1「海の企画展」(海洋教育の一環として開催する企画展・特別展)、プログラム 2「海の博物館活動」(海洋教育を実践する各種普及事業)、プログラム 3「海の学び調査・研究」（海洋教育を実践するための調査研究活動）、及び当該年度ごとに特定のテーマを設定して支援する「海の学び特別サポート」（本年度テーマ：オンライン学習プログラムの開発）を支援・展開することで、社会教育施設からの海洋教育の普及を図った。支援実施状況は下記のとおりである。
・プログラム 1「海の企画展サポート」　12 事業 12 団体
・プログラム 2「海の博物館活動サポート」Aコース博物館活動　12 事業 12 団体
・プログラム 2「海の博物館活動サポート」Bコース博学連携活動　4 事業　4 団体
・プログラム 3「海の学び調査・研究サポート」　5 事業　5 団体
・「海の学び特別サポートプログラム」（本年度テーマ：オンライン学習プログラムの開発）
採択事業無し
合計：33 事業 33 団体
特に、プログラム 1「海の企画展サポート」での支援については、日常的に「海洋」をテーマに扱い難い博物館においても期間を限った企画展や特別展等として海洋を扱えるよう、より多様な博物館での海洋教育の実施を目指した。また、プログラム 2「海の博物館活動サポート」については、体験的な活動を通じた学びの機会創出に向け、タイムリーなテーマ・活動への支援を行った。
なお、第三者視点導入の観点から、プログラム 1・プログラム 2 及び特別サポートプログラムにおいて『来場者・参加者の「海の学び」調査（アンケート）』を実施すると共に、各サポート館自体が海の学び活動を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解を得られたのかの情報収集を目的とした「実施者アンケート」を実施した。
また、当館と連動しながら新たな海洋教育活動を目指す博物館や人材を「海の学び拠点」及び「海の学びコーディネーター」と位置付け、地域の特色を生かした継続的な海洋教育活動の体制構築や多様なセクターと連携した地域ぐるみの活動を発展的に実施する人材・博物館等の発掘と育成に向けた活動を行った。
「海の学びコーディネーター」とその候補者を対象とした情報交換を実施し、今後における連携活動等の活発化や推進に向けた打合せを行った。
あわせて、当初は各地域単位での海洋教育推進に向けた議論を行う予定であったが、地域単位ではなく、全国の各コーディネーター同士や他の海洋教育関連団体（NPOや学校教員、学識関係者、海洋教育推進関連団体）も新たに参画することで、より多角的な視点から海洋教育推進に向けた協働事業案作りや情報

交換を推進する方向に転換し、あわせて Web 上で随時やり取りが出来るシステムを Discord 上で構築・運用した。
さらに、昨年に引き続き今回第二回目として開催した「海の学びコーディネーター会議」であったが、前回からの発展的な変更点として、参加対象セクターの拡大（全国の学校教員や学識関係者、地域のNPO等各種団体、海洋教育関連団体）と、海洋教育推進関連府省の協力体制構築（内閣府、国交省）を行うことで、それぞれの立場から行われている海洋教育推進に関する取り組み内容の共有や、ワークショップを通じた議論と連携事業案の提案などが行われ、今後の継続した海洋教育推進に向けた巡回展示事業案が提案されるなど、有機的・具体的な議論の場とすることが出来た。
その他、本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的にした Web ページの公開・運用を行うとともに、2024 年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいの周知を行った。
なお、海に関する基本的・普遍的なテーマや関心の高い話題を盛り込んだオンライン学習支援コンテンツとして、様々な博物館や事業テーマに活用頂ける『オンライン学習支援コンテンツ動画「海の学び動画」』については引き続き Web ページで公開することで、サポート対象館等への提供を通じた各館事業における「海の学び」内容の充実や新規実践の推進を図った。
また、自宅で過ごす幼児・小学生を主な対象にした学習支援活動として、Web サイトを活用した全国の博物館が展開する海洋教育関連コンテンツを集約したリンク集を『「海の学び」どこでも図鑑』として引き続き公開することで、多岐にわたるテーマの「海の学び」の機会を創出した。

本事業の実施状況の詳細

1.各サポートプログラム事業の実施状況

	設定 件数	申請 件数	支援 実施	入場者数
プログラム 1 「海の企画展サポート」	13	20 団体 20 事業	12 団体 12 事業	1,074,286 名
プログラム 2 「海の博物館活動サポート」 A コース博物館活動	9	13 団体 13 事業	12 団体 12 事業	594,215 名
プログラム 2 「海の博物館活動サポート」 B コース博学連携活動	6	5 団体 5 事業	4 団体 4 事業	3,583 名
プログラム 3 「海の学び調査・研究サポート」	5	6 団体 6 事業	5 団体 5 事業	—
「海の学び特別サポートプログラム」 2023 年度テーマ:「オンライン学習プログラムの開発」	3	申請無し	実施無し	—
合計	36	44 団体 44 事業	33 団体 33 事業	1,672,084 名

2.「海の学び拠点」及び「海の学びコーディネーター」候補の発掘・育成と、連携協定の締結

本サポート事業における目標の一つである「海の学び拠点」及び「海の学びコーディネーター」候補の発掘・育成については、これまで本サポートを活用頂いた各博物館の事業担当者を対象に、海洋教育の推進

に理解・関心があり、当サポート事業と連動しながら新たな海洋教育活動を目指す博物館や人材を「海の学び拠点」及び「海の学びコーディネーター」候補として位置付け、新たに 5 館 6 名を発掘・育成することができ、現状の候補者合計は 31 館 35 名となった。
また、これまで発掘・育成してきた候補のうち、「海の学び拠点」及び「海の学びコーディネーター」としての連携協定締結に向けた打合せを 14 カ所にて行った結果、本年度は「海の学びコーディネーター」として 6 館 8 名と正式に連携協定を締結し、海洋教育の継続的・発展的な推進に向けた当館との連携体制を構築することが出来た。今後は各コーディネーターとの情報交換を通じて、コーディネーターを中心とした各地域・分野単位での連携活動や継続事業化の推進をサポートするとともに、新たなコーディネーターとの連携協定締結を通じた推進体制の拡充を図りたい。

3.海洋教育推進に向けた Web 上での海洋教育推進システム「海の学び交流ひろば」の開設と運用
「海の学びコーディネーター」を中心に、コーディネーターと協働する各地域内の NPO 等各種団体や、学校教員、学識関係者、海洋教育推進関連団体を交えたオンライン上での情報交換・交流サイトを開設し、海洋教育の推進に向けた議論や情報交換を実施した。

(1)時期：2023 年 12 月～2024 年 9 月
(2)場所：Web（Discord）
(3)登録者数：合計 54 名

4. 第 2 回「海の学びコーディネーター会議」の開催
全国の「海の学びコーディネーター」を一堂に集めると共に、全国の学校教員や学識関係者、地域の NPO 等各種団体や海洋教育関連府省を交え、海洋教育の全国的な推進体制構築を見据えた議論・ワークショップを行った。
前回開催時は「海の学びコーディネーター」のみを対象とした議論の場としたが、その際に他のセクターとして学校団体や海洋関連団体、地域の様々な協力者等も加わるべきとの意見が出ていたことから、今回から参加対象セクターを拡大のうえ実施した。また、さらに海洋に関する取り組みを行う関係省庁として、内閣府総合海洋政策推進事務局から基調講演を頂いたほか、国土交通省海事局にもオブザーバー参加頂くなど、当財団を中心とした社会教育分野からの総合的な海洋教育推進体制の構築を目指した。
前回からの発展的な変更点として、参加対象セクターの拡大と、海洋教育推進関連府省の協力体制構築を行うことで、それぞれの立場から行われている海洋教育推進に関する取り組み内容の共有や、ワークショップを通じた議論と連携事業案の提案などが行われ、今後の継続した海洋教育推進に向けた巡回展示事業案が提案されるなど、有機的・具体的な議論の場とすることが出来た。

(1)開催日程：令和 6 年 3 月 11 日(月)～3 月 12 日(火)
(2)開催場所：東京ベイ有明ワシントンホテル
(3)参加者数：合計 83 名

5.「海の学びミュージアムサポート」事業専用ホームページの構築と運用
本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的に Web ページの公開・運用を行った。これまでの各サポート採択館とプログラム内容の告知や活動報告書の公開により、今後における社会教育からの「海の学び」活動の推進を目的とした博物館が実践する海洋教育の実践事例アーカイブ化を行った。あわせて 2024 年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいの PR を行い、一般及び博物館関係者向けに本事業成果や事業概要を分かり易く伝えるための場とした。

■「海の学びミュージアムサポート」Web サイト
①アクセス者数：17,696 人（53,157 ページビュー）
※集計期間：2023 年 4 月 1 日～2024 年 9 月 30 日
②アクセス者の平均閲覧ページ数：3.0 ページ
　＜内訳＞
・新規閲覧者：93.88％
・リピーター閲覧者：6.11％
■「海の学びミュージアムサポート」Web
サイト内『「海の学び」どこでも図鑑』
①掲出件数：30 団体 38 コンテンツ
②ページ URL：https://uminomanabi.com/zukan/

6.『来場者・参加者の「海の学び」調査（アンケート）』の実施
各サポート対象事業における「海の学び」成果の把握や、今後において全国の博物館等が実施する「海洋教育の推進」活動をより効果的にサポートするための体制構築に向けた事業内容検討用の基礎資料を得ることを目的として、プログラム 1・プログラム 2 および海の学び調査・研究サポートプログラムにおいて各博物館等が開催したサポート対象事業への来場者・参加者を対象とした、「来場者・参加者の「海の学び」調査（アンケート）」を実施した。
また、第三者評価の視点から客観的な「海の学び」の効果測定を行うことを目的とし、今後の各サポート対象事業における「海の学び」の成果と傾向を把握するための基礎資料として位置づけることが出来た。

【「海の学びミュージアムサポート」事業として】
・設問「海について学べましたか？」の集計では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計がプログラム 1 では 90％、プログラム 2A コースでは 89％、B コースでは 89％、プログラム 3 では 88％を占め、社会教育現場（博物館等）から「海洋」に関する生涯学習の場を広げる当事業の目的として一定の成果が認められた。

1　　プログラム 1「海の企画展サポート」サンプル数：4,844（13 事業）
2　　プログラム 2「海の博物館活動サポート」Aコースサンプル数：2,567（12 事業）
3　　プログラム 2「海の博物館活動サポート」Bコースサンプル数：283（4 事業）
4　　プログラム 3「海の学び調査・研究サポート」サンプル数：114（5 事業）
合計：7,808（34 事業）

7.実施者に対する「海の学び」調査（アンケート）の実施
各プログラムのサポート館が本サポート事業を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解が得られたのかの情報収集を目的として、各プログラムの実施者・実施館を対象としたアンケート調査を実施した。

【「海の学び」の理解度・必要性について】
・設問「海の学びを理解できたか」の集計では、「大いに理解できた」と「ある程度理解できた」の合計が 100％となった。また、設問「海の学びの必要性を感じられたか」の集計では、「大いに感じられた」と「ある程度感じられた」の合計が 100％となり、海洋教育に特化した本事業のサポートを受けることにより、社会教育現場（博物館等）において海洋教育の理解や必要性が感じられたとの回答が得られた。

①プログラム 1「海の企画展サポート」サンプル数：12（12 事業）
②プログラム 2「海の博物館活動サポート」Aコースサンプル数：12（12 事業）
③プログラム 2「海の博物館活動サポート」Bコースサンプル数：4（4 事業）
④プログラム 3「海の学び調査・研究サポート」サンプル数：5（5 事業）

⑤「海の学び特別サポートプログラム」サンプル数：0（0 事業）
合計：33（33 事業）

8.各サポートプログラムの実施内容詳細：

（1）プログラム 1「海の企画展サポート」への支援
（申請：20 団体 20 事業、支援実施：12 団体 12 事業）

①

名称　：地球の限界を超えた海洋プラスチックゴミ～その正体を探る～
主催者　：蘭越町（蘭越町貝の館）
開催時期　：2023 年 7 月 1 日～2023 年 10 月 31 日
場所　：蘭越町貝の館、蘭越町貝の館 大気・海洋交流センター
内容　：海洋プラスチックゴミ問題は、社会的問題として、マスメディア等で取り上げられる機会は増えつつあります。しかしながら、博物館やその他機関において、サイエンスサービスとして、マイクロプラスチックゴミの漂着時間の推定や、付着している物質について調べられる機会がありません。プラスチックアナライザー（FTIR）とエネルギー分散型蛍光X線分析装置 EDX－8100 を導入し、質の高い体験型サイエンスサービスを実施することで、深い学びが期待され、環境問題の早期解決につながる人材育成することを目的とした事業です。

②

名称　：企画展「飼育員すばる君のひみつ道具」
主催者　：公益財団法人ふくしま海洋科学館（ふくしま海洋科学館）
開催時期　：2023 年 7 月 15 日～2024 年 2 月 29 日
※なお、2024 年 3 月 1 日～2024 年 9 月 1 日は自主事業として継続実施
場所　：ふくしま海洋科学館
内容　：水族館は、健全な環境の海に生息する生物を収集し、人工的環境の中で保持し、海の価値・重要性について教育する、「海」を包括的に利用する「産業」である。本事業は、その最も重要な役割を担う実行部隊である飼育員の仕事や工夫を通して、水族館が日頃得ている海の学びを観覧者と共有する企画展として開催した。
一般的に、飼育員は「生きものを飼育している人」程度の認識であるが、どうやって生物を収集し、健康状態を保ち、その特徴がわかるように展示しているか、ということについてはあまり理解されてはいない。普段は明かさない、飼育員の工夫をあえて展示することにより、特別感をもたせ、その背後にある「海の学び」についての感受性を高めることを目的とした。
企画展会場内では、飼育員が使用している道具を触ることができ、体験することに重点を置いた。併せて、飼育員の仕事について知ることができる付帯事業を実施し、参加者が家族や友人、周囲の人々と共に海について考える機会を提供した。

③

名称　：千葉県誕生 150 周年記念事業　房総の海をめぐる光と影とアート展

主催者　：千葉県立美術館

開催時期　：2023 年 7 月 19 日～2023 年 9 月 18 日

場所　：千葉県立美術館

内容　：三方を海で囲まれた千葉県は、冬暖かく夏涼しい海洋性の温暖な気候を特徴とし、海産物に恵まれる一方、産業都市としての湾岸エリア、美しい海岸線など、全国屈指の水揚げ量を誇る漁業など、海の恵みを受けて発展してきた。
本事業は千葉誕生 150 周年を記念して、千葉県の発展を支え育んできた海に注目し、「房総の海をめぐる光と影とアート展」をメインテーマに、現代アートと伝統的なアートの 2 部構成で、海の美しさと豊かな文化を紹介する。
第1部では、伝統的なアートの分野から、「描かれた房総」をテーマに、千葉の海などを描いた浅井忠、ジョルジュ・ビゴーなどの絵画作品を、題材となった各地域の海にちなんだ文化的特徴を調査・研究し、その成果を写真と共に紹介した。
第 2 部では、現代アートの分野から、クワクボリョウタ氏に「房総の海」をテーマとする作品制作を委託し、その成果作品を中心に展示して、多面的な表情を持つ千葉県にとって、すべてを内包する海の美しさ、素晴らしさを紹介する。千葉県誕生 150 周年を記念する事業としての作品制作依頼を受けたクワクボは、困難な課題に苦悶したが、そのプロセスまでも作品化し、落花生、チバニアンなどさまざまなモチーフを検討しながら、すべてを内包する魅力を持った海の魅力を発見するに至り、《LOST#19　しおさいのくに》という作品に調査結果を凝縮させた。セロハンテープケースや醤油びんのふたなど、日常のありふれたモノが漁港をイメージさせたり、トンネルを抜けた先に見える水平線をクリアファイルで再現したり、日常のものが海を思わせるモチーフへと変幻し、悠久の時間が流れる作品に、多くの来場者が没入した。
関連事業として、1 回の美術講演会、1 回のアーティストトーク、1 回のキュレータートークに加え、4 回のギャラリートークを開催して、多様な視点から、千葉県の海の考察を行った。

④

名称　：魚の色

主催者　：益財団法人新潟市海洋河川文化財団（新潟市水族館マリンピア日本海）

開催時期　：2023 年 7 月 14 日～2024 年 3 月 31 日

場所　：新潟市水族館マリンピア日本海

内容　：魚の色には、捕食者から身を守るためのカモフラージュであったり、繁殖期にパートナーの気を引くためであったりと、実は生きるために重要な役割がある。何気なく思われがちな生き物の色に焦点を当てた企画展示を行うことで、海の生息環境と体の色に密接な関係が見出せることに気づいてもらう事を趣旨とする。
海はなぜ青いのか？なぜ目立つ赤い色の魚がいるのか？等の疑問を、分かりやすく紹介し、水生生物への理解と環境への関心を高める機会を提供し海や魚を学ぶ機会とする。

⑤

名称　：第 37 回特別企画展「カイジュウ博 2023－海で暮らす仲間たち－」

主催者　：豊橋市（豊橋市自然史博物館）

開催時期　：2023 年 7 月 14 日～2023 年 9 月 3 日

場所　：豊橋市自然史博物館

内容　：鯨類や鰭脚類等の海獣（＝海棲哺乳類）を主題とした特別企画展を開催し、海獣の多様性とそれらが海で暮らすためにどの様に適応・進化したかを紹介した。併せて、当館が実施している渥美半島沿岸に漂着する鯨類の調査・収集活動の成果を初公開し、渥美半島沿岸や三河湾といった身近な海域にも様々な鯨類が棲息するとともに、それらを支える海洋環境が存在することを紹介した。

また、日本人が古から現在まで様々な形で海獣を利用し、それらから多くの恩恵を受けてきたことを紹介するとともに、かつて豊橋や渥美半島で暮らしていた人々も海獣を利用し、恩恵を受けていたことを紹介した。そして、海獣を含む海棲生物の多様性や海洋生態系を脅かしている海洋プラスチックゴミの現状と課題、それを減らす取り組みを紹介した。なお、付帯事業として記念講演会、展示解説会、ワークショップ、小中学校向けオンライン授業を実施し、上記内容を更に深く学ぶ機会を設けた。

⑥

名称　：特別展「三重県のさかな　伊勢エビ」

主催者　：公益財団法人東海水産科学協会（鳥羽市立海の博物館）

開催時期　：2023 年 7 月 15 日～2023 年 11 月 23 日

＊伊勢エビの生体としめ縄への利用の展示は 2024 年 2 月 29 日（水）まで実施。

場所　：鳥羽市立海の博物館　特別展示室（展示本体）、展示 A 棟（生体展示）

内容　：伊勢エビは“三重県のさかな”に指定される、本県を代表する海産物である。

秋期～初春にかけての旬の味であると同時に、地域の象徴として地域振興にも利用されている。また長寿や幸福の願いを込める、または邪を払う魔除けのアイテムとして、さらにはしかの薬としても使用されるなど、単なる豪華な食材としてだけではなく、日本人の生活と様々な面で関わってきた。

本展は伊勢エビを素材として、海産物の伝統的な利用と奥深い魚食文化、漁撈習俗、信仰など、人間と海との多様で密接な関係性を感じ、学んでもらうことを目的に企画した。

様々な漁獲方法を通じて、生物の習性や地形を巧みに利用する漁業の奥深さ、また習性そのものへの興味を喚起した。

食材以外に、祭礼やまじないなどでも伊勢エビが利用されていることから、信仰など多様な面で海の資源を利用してきたことを認識してもらえ、それら海の文化の継承にも寄与できた。

伊勢エビの漁獲量減少や、諸々の漁獲制限の現状を伝え、持続的に海洋資源を利用し、自然と共生してゆくための、規則順守の重要性に理解が深まった。

付帯の様々な体験事業により、海の生きものの身体の構造や生態の面白さ、魚食文化の魅力と価値、海洋環境の変化などに対して、興味を強く喚起することができた。

⑦

名称　：特別展「海の祈りー海浜の神社と伊勢神宮ー」

主催者　：斎宮歴史博物館

開催時期　：2023 年 10 月 7 日～2023 年 11 月 26 日

場所　：斎宮歴史博物館

内容　：島国であるわが国において、古くから海路を介することで行われた人やモノ、文化などの交流や移動が、想像を超える困難を伴ったことは、さまざまな歴史資料などからも想像するに難くなく、人々が航海の無事や安全などを神々に祈願していたことは、世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群や八代神社（三重県鳥羽市）「伊勢神島祭祀遺物」などで知ることができる。
また、伊勢神宮で古より続く祭儀に用意される御饌などに関連する資料からも人知の及ばぬ存在に対する畏怖や地域の歴史から現在も続く神々への日々の安寧を願う想いを紹介する。これらの感謝を示す気持ちを祈る祭祀や風習などについて幅広い世代の人々に対して、古代の歴史や現代まで続く文化、風習などについての気づき、興味関心をうながし、次世代育成にも寄与する。
さらに、地元自治体や観光協会等とも連携、PR を展開することにより、地域の文化や観光の振興につなげる。

⑧

名称　：「魚へのまなざし ―長嶋祐成と大野麥風―」

主催者　：公益財団法人尼崎市文化振興財団（尼崎市総合文化センター）

開催時期　：2023 年 5 月 27 日～2023 年 7 月 2 日

場所　：尼崎市総合文化センター、北堀キャナルベース(水質浄化施設)、尼崎運河

内容　：水彩絵の具を用いて美しく透き通るような生命感溢れる魚を描く画家・長嶋祐成と、昭和初期に「魚の画家」として名声を博した大野麥風の木版画による魚の絵を展示した。時代や技法が異なる二人の画家の表現や眼差しの違いを対比するとともに、魚の生態についても紹介した。
展示構成は、1章から3章までを各画家の紹介と身近な尼崎の海の魚、日本の海の魚へと対象を広げていき、魚の特性や生息地域なども学べるよう工夫した。また、第4章では、海とともに発展してきた尼崎の歴史と現在について展覧会を通して紹介し、市民に地域に愛着を持ってもらうとともに、市内外に対してイメージアップを図った。魚の絵の魅力だけでなく、漁具や歴史文献により、生活環境にも意識が向けられるような内容とした。
　展示作品・資料は、近隣の美術館や博物館に所蔵されている貴重な作品・資料を借用するとともに、現在活躍中の魚を専門的に描く画家に展覧会のテーマに合う作品を描いて出品してもらい、魅力ある展示空間を創出するよう努めた。
　付帯事業では、子ども用副読本やスタンプラリー、魚釣りゲームなど、子どもが楽しみながら学べるよう工夫し、今後も海や魚に興味を持ち、関連する本を読み、美術館や博物館、水族館などに足を運ぶなど、学びを深められるよう工夫した。
また、出品作家によるトークやワークショップを通して、参加者が現在の海の環境などを知り、関心を深める機会とし、運河クルーズやSUP体験、環境学習などの野外プログラムやフィッシュシェアリングの弁当販売を通して、阪神工

業地帯の中核であった尼崎市の臨海部が、近年は環境共生型のまちづくりの拠点となっていることを紹介し、生活の中で環境保護活動に取り組むきっかけ作りに努めた。

⑨

名称　：企画展「来島海峡と潮流信号所」

主催者　：愛媛県総合科学博物館

開催時期　：2024 年 2 月 17 日～2024 年 4 月 7 日

場所　：愛媛県総合科学博物館　企画展示室

内容　：「来島海峡について」「海峡の安全をまもる」「来島海峡を通る船舶」「来島海峡周辺の産業」の4つのコーナーにおいて来島海峡の自然、船舶、産業等について展示したほか、関連イベントも開催し、来島海峡ついて学ぶ機会を提供した。

⑩

名称　：特別展「黒潮はくぶつかん～日向灘から琉球列島の生きものと海の恵み～」

主催者　：宮崎県総合博物館

開催時期　：2023 年 10 月 14 日～2023 年 11 月 26 日

場所　：宮崎県総合博物館

内容　：この展示会では、黒潮をキーワードに、本県から琉球列島の黒潮ルートの生きものや日向灘沿岸部の地形・地質、海岸部で暮らす人々のくらし、海産物を使った郷土料理などを紹介する。さらに黒潮に洗われる宮崎の海は私たちの暮らしや生き物たちにとって大切な環境であることを認識していただき、黒潮が流れる日向灘や黒潮に育まれる自然を大切にする心を育む機会とした。
第１章は「黒潮が育む日向灘のいきもの」と題し、ザトウクジラの骨格標本、ジンベエザメやカツオなどの黒潮が育むよく知られている魚類、海藻等を展示する。また、日向灘ミニ水族館を設置し、本県の沿岸部に生息する魚類、エビやカニなどの甲殻類など生体展示を行い、宮崎海洋高校のブースも設け、学校での活動紹介や日向灘の生き物の生体展示にも協力してもらった。
第２章は「日向灘沿岸の地形と化石」と題し、宮崎層群から産出する古代の黒潮沿岸に生息した熱帯性の造礁サンゴやクジラなどの海洋生物化石などを紹介した。また、日向灘沿岸に見られる鬼の洗濯岩などの海の浸食や大地の隆起によって形成された地形を模型などで展示した。
第３章 は「日向灘沿岸と琉球列島の植物」と題し、黒潮ルートに見られる琉球列島と共通してみられる本県の植物や南方系の植物の標本、レプリカ、模型などを展示した。また、国立科学博物館巡回展「琉球の植物」のパネル展示と併せて奄美から沖縄の植物を紹介した。
第４章は「黒潮ルートの世界自然遺産」と題し、黒潮の通り道に位置する世界遺産となった琉球列島の自然を紹介した。浜辺やマングローブ周辺に生活の拠点を置く動植物やヤンバルクイナ、アマミノクロウサギなどの琉球列島の固有種などを剥製やレプリカ、実物標本などで紹介した。
第５章は「日向灘と人々の暮らし」と題し、人々が暮らしの中で使用してきた土器、漁労具、貝塚の遺物、貝の装飾品、陶磁器、産物のほか、遣明船に近似している船が描かれた絵巻物の複写物や遣明船に関与した飫肥領主 島津忠広に関する文書史料、漁の歴史と海に生きる人々の技を支えた道具、かつて

の港町の写真、漁業に携わる人々が豊漁と安全を願って奉納する神楽の写真、海産物を使った郷土料理模型などを展示した。
第6章は「海のふしぎないきもの」と題し、新聞紙で海の生き物を制作する造形作家木暮奈津子氏の「海の不思議な生き物」の作品の中から日向灘沿岸部や黒潮の流れに関連する作品を展示した。
エントランス・ロビー展示では、全長5mのジンベエザメ拡大写真フォトスポットや日南海岸サンゴ群集保全協議会の会員が日南海岸で撮影した「日南海岸のサンゴといきもの写真展」なども行った。

⑪

名称　：連続展示：海を越える人々
（前期）企画展　琉球と倭寇のもの語り
（後期）特別展　旧石器時代の人類―海を越えた最初の人々―

主催者　：沖縄県立博物館・美術館

開催時期　：（前期）2023 年 9 月 22 日～2023 年 11 月 19 日
（後期）2023 年 12 月 12 日～2024 年 2 月 12 日

場所　：沖縄県立博物館・美術館、さんごゆんたく館

内容　：海の存在が現在の沖縄を形作る核になったこと、そして琉球を取り含む中世東アジア世界が現在の東アジア情勢と深く関係していることを「海」を通して学んでいく効果は極めて大きいものであると言える。これらのことを踏まえて、海を軸にして中世東アジアの歴史を学ぶことによって琉球列島の歴史や文化を知ることができ、琉球列島を取り巻く周辺地域の状況を知ることができる内容へと昇華していく内容で展示を構成し、そして関連催事を行っていった。
また、沖縄県立博物館・美術館では、開館以来、旧石器時代の人類の暮らしぶりの解明を目指し、フィールドワークに基づく調査研究を沖縄島南部において継続している。とりわけ南城市サキタリ洞遺跡における約 2.3 万年前の世界最古の貝製釣針の発見やユニークな島嶼域への適応の解明といった成果は国際的にも注目を集めている。2018-2021 年のサキタリ洞遺跡の発掘調査によって、保存良好な旧石器時代の複数の埋蔵人骨の発見を含む極めて重要な成果が得られた、この成果を受け、最初に海を越えて琉球弧へと到達した人々がどのような人々であったのか、サキタリ洞遺跡から明らかにされた豊かな実像を紹介した。また、他地域にも視野を広げ、人類進化のなかで最も長い期間を占める旧石器時代に我々の身体的・文化的基盤がいかに形成されたのかを具体的な資料と様々な分野の研究成果を交えながら観覧者に伝えた。

⑫

名称　：企画展「知られざる海生無脊椎動物の世界」

主催者　：独立行政法人国立科学博物館（国立科学博物館）

開催時期　：2024 年 3 月 12 日～2024 年 6 月 16 日

場所　：国立科学博物館（東京・上野公園）
日本館 1 階企画展示室および中央ホール

内容　：これまで展示等で紹介される機会の少なかった、海生無脊椎動物を“主役”において、興味深い形態や生態、そして海生無脊椎動物と人の暮らしとの関わり合いなどを紹介した。これらの展示を通して、海には海生無脊椎動物の多様な世界が広がっていること、また、海生無脊椎動物が我々の身近にも存在す

ることを知っていただく機会を提供することを目標とした。
関連事業として、実体顕微鏡を使用した講義・実習を行い、「メイオベントス」という単語だけでは想像し難い、小さな海の生き物の観察を行った。実際に観察することで、海に広がる生き物の世界を肌で感じていただくことができた。
小さな生き物もご覧いただけるよう、会場内に3台の顕微鏡を設置した。また、イラストや映像、クイズ等を用いることで、なるべくわかりやすく紹介をする工夫をし、海生無脊椎動物への理解を深める場とした。

(2)プログラム2「海の博物館活動サポート」Aコース博物館活動への支援
(申請:13団体13事業、支援実施:12団体12事業)

①

名称　：瀬戸内海歴史民俗資料館開館50周年記念事業
れきみんで瀬戸内海を学ぶ

主催者　：香川県立ミュージアム(瀬戸内海歴史民俗資料館)

実施時期　：2023年4月15日～2023年11月26日

場所　：瀬戸内海歴史民俗資料館

内容　：瀬戸内海歴史民俗資料館が開館 50 周年を迎える機会に合わせて、これまでの館の活動実績や収蔵資料、立地などの特性を活かした4つの海の学びの事業を実施し、瀬戸内海とその沿岸にくらす人々の歴史的なつながりについて改めて考える機会を提供した。開催にあたっては、当館が専門とする歴史・民俗分野だけでなく、自然、水産業、海上交通、環境改善、地域活性化、芸術などさまざまな分野の視点を交わらせることで、関心を持つ人々たちを広げるとともに、海と人の多面的なつながりについて学び、身近な海への関心を高めることにつなげた。また、近隣小学校と連携した活動を行うことで、今度も活用される子どもたちの学びの場を形成するとともに、香川大学創造工学部と連携した企画・運営を行うことで、大学生地震 が海について理解を深め、継続的な連携関係を築き、子どもむけの学習プログラムの開発などに共同で取り組む体制を築くことができた。
連続セミナー「5つの視点から瀬戸内を見る」では、地質学の専門家や漁師、高校生やアーティストなどさまざまな分野で活動する講師を招き、年間の学びの導入となるガイダンス的なセミナー5回と、その内容を紹介するパネル展示を実施した。講師の年代も幅広く設定したほか、学芸員が聞き手となることで当館の活動を踏まえた話題を展開することができた。また、各回の概要を記録冊子にまとめることで、セミナーに参加できなかった多くの人にも内容を知っていただけるようにした。
そらあみでは、海の自然とそれに挑む人々の知恵が生み出した「網」をテーマに、アーティストや学芸員と一緒に学び、編むことで五感を使った体験的な学びを提供した。期間中に来館した方々も編むことができるようにしたほか、解説シートを配布することで海の自然と人、網の歴史について学ぶことができるようにした。多くの人が参加して完成したそらあみを展示室に掲げることで、網越しに海の民俗資料を見つめ、そこに営まれてきた海と人の関わりについて考える機会を提供した。
ナイトミュージアムでは、夜間に開館し、暗闇と灯りから得られる体験的な学びを提供した。開館30周年に設置された灯台モニュメントに新規寄贈のフレネルレンズを仮設し照明を灯したほか、船舶灯などの展示や屋上展望台での夜の

海の解説、ウミホタル鑑賞会、船のペーパークラフト工作などを実施し、子どもたちにも楽しみながら学んでもらえるよう工夫した。また、香川大学創造工学部が企画した展示解説ショーでは光や音を駆使して展示されている瀬戸内の船や漁撈用具などを紹介し、展示資料を新たな視点から見ていただく機会となった。
シンポジウムでは、当館のこれまでの活動などを紹介したうえで、民俗学者とグラフィックデザイナー、当館学芸員が登壇し、「《海》と《日常》の間をつなぐ」というテーマでの基調講演やパネルディスカッションを行った。デザインやアートに興味を持つ若い世代の参加者に、瀬戸内の民具からわかる海と人の文化の面白さを知っていただく場になるとともに、民俗資料や資料館をどのように解剖し、どこから見せることで面白さを発見するのかを考える機会になった。

②

名称　：様々な標本を通して海を学ぼう！カニ類を用いた水辺環境の学習プログラムの開発と実践

主催者　：和歌山県立自然博物館

実施時期　：2023 年 4 月 17 日～2024 年 3 月 31 日

場所　：和歌山県立自然博物館他

内容　：本事業は、海洋生物の多様性や生息環境での役割について学べる展示および野外教育活動の実践のため、身近な水辺で見られるカニ類に着目し、それらの多様な手法で作製した標本や画像、物品を活用して、海の学び活動へ継続的に利用可能な教材パッケージおよび教育プログラムを開発し、実践することを活動の内容とした。
和歌山県立自然博物館は、いわゆる「水族館」と「博物館」が融合した展示活動と、海の生物や生態系についてより深く学ぶ社会教育活動を継続しており、長年にわたって市民へ「海の学び」を提供してきた。その過程で、来館者の身近な海産生物であるカニ類への関心が高いことに気付いたため、カニ類の学習を通じて海の学びを深めるための教材を作製することを発案した。
カニ類をフィールドで採集、作製した標本を生息環境ごとにおさめた教材を作製した。また、直接触れることのできる標本や、色彩が良好に保存される標本なども併せて作製した。これらを当館が実施する自然観察行事や、学校等へ赴いての講座、当館および他館との協働などの場面で学芸員自身の経験情報と共に活用することで、各活動を活性化させた。
来館者や行事参加者には、身近な海辺環境におけるカニ類の生息状況や観察の手法。標本の作製方法等を学び、カニ類を含む海産生物のおもしろさやすばらしさを学んでいただいた。これらの学習の延長として、身近な海辺環境の大切さや重要さに気付き、今後の自発的な学習を促すことが事業の最終的な目的である。

③

名称　：未来へつなぐ大切な命

主催者　：青森県営浅虫水族館

実施時期　：2023 年 7 月 22 日～2024 年 3 月 31 日

場所　：青森県営浅虫水族館　おらほのめんこちゃんコーナー

内容　　：栽培漁業や養殖漁業で生産される種苗や認知度の高いクリオネ、水族館で生まれた稚魚、クラゲなどの小さな生物を集約して小さな水槽で展示することで来館者の関心を引き、解説活動で地球温暖化による海水温の上昇や海流の変化などの海洋の環境悪化が生き物たちへ悪影響を与えていることを知る機会とし、そうした小さな生物でも生きていける海を次世代へ残そうとする機運の創出をめざしました。

④

名称　　：パレオパラドキシアが見たみずなみのうみべ―化石から学ぶみずなみが海だったころ―

主催者　：瑞浪市教育委員会スポーツ文化課（瑞浪市化石博物館）

実施時期：2023 年 5 月 4 日～2024 年 3 月 16 日

場所　　：瑞浪市化石博物館

内容　　：2022 年に岐阜県瑞浪市で発見された海生ほ乳類「パレオパラドキシア」の化石は、ほぼ全身を残しており、同年産状レプリカを制作した。本事業ではこの産状レプリカを活用して、小中学校における出前授業などを通じ、1800 万年前～1600 万年前の瑞浪市に海が広がっていた頃の様子を学ぶ機会の創出、絶滅した海生ほ乳類の謎を解きながら海の生き物に対する関心を深めることを目的として事業を実施した。
市内小中学校への出前授業に際しては、講義だけではなく産状レプリカを展示することにより瑞浪市が海だった頃のイメージを描いてもらい、海に対する造詣を深めていてもらう。また、オンラインツールを用いた展示解説を行い、年齢層にこだわらないワークショップとすることで、海の学びの機会の充実を目指した。さらにガイドブックを制作し、出前授業や講座等での副教材として配布することにより、繰り返し学習による学びの質向上と持続可能な事業を目指した。

⑤

名称　　：動くキャンパスガリンコ号 III で学ぶオホーツク海の魅力

主催者　：北海道立オホーツク流氷科学センター

実施時期：2023 年 6 月 1 日～2024 年 4 月 30 日

場所　　：北海道立オホーツク流氷科学センター　多目的ホール

内容　　：翼足類は巻貝の仲間で、クリオネ類は北半球で 3 種類、南半球で 1 種類が知られており、オホーツク海ではハダカカメガイとダルマハダカカメガイの 2 種類が確認されている。ハダカカメガイは回遊中のサケの餌となるなど食物連鎖で重要な役割を果たしているが、海洋酸性化の影響を受ける種類として注目されている。これまでのサポートで夏季の分布や生息環境が明らかになったが、冬季の分布や環境は海氷に阻まれ解明されていない。
本調査・研究では寒流が勢力を増す 11 月～4 月まで月 1 回砕氷船を使ったプランクトン、海洋環境調査を行い、以前サポートを受けた夏季のデータと合わせて通年のものとして海洋環境の季節変化や冷水域の生態系を明らかにし、科学的根拠資料としてワークショップなどで比較するなど活用する。
砕氷船に乗船し、実際にプランクトンを採集して、持ち帰り、顕微鏡観察するワークショップを行い域の海洋環境などの現状を啓蒙し、環境保全への意識醸成に役立てる。また、翼足類クリオネをキーワードに工作などで形態などを学

び、生息する海洋環境や海氷に影響される北海道オホーツク沿岸地域の気象を学ぶワークショップも開催した。

⑥

名称　：『シーボルト来日200周年記念イベント「タコとエビとシーボルト」』

主催者　：一般社団法人野母崎産業活性化協会（長崎市恐竜博物館）

実施時期　：2023 年 5 月 28 日～2023 年 11 月 30 日

場所　：長崎市恐竜博物館（長崎のもざき恐竜パーク構成施設）

内容　：本事業は、日本に西欧の自然科学を伝え、世界に日本の海洋生物を広めたシーボルトの来日 200 周年を記念した長崎独自のイベントとして開催するとともに、身の周りの海や海洋生物、自然科学への関心を高め、環境問題の啓発や持続可能な社会の実現につなげるため、専門家による講演会や磯遊び講座、凧づくり講座、生体観察といった各事業を幅広い世代に対して開催した。また、それぞれの事業において、地域住民と専門家、自治体が連携して実施することにより、地域の海や水産資源への興味関心を高め、海を中心とした自然に関わる次世代やインフルエンサーの育成にも寄与する内容とした。なお、開催地域「野母崎」の「タコ祭り」や「伊勢エビ祭り」とタイアップすることで、申請事業実施後も海の学びの機会として継承していく契機となることを目指した。

⑦

名称　：水族館と異分野の融合で目指す新たな海の学びの創出

主催者　：株式会社新江ノ島水族館（新江ノ島水族館）

実施時期　：2023 年 5 月 1 日～2024 年 4 月 13 日

場所　：新江ノ島水族館他

内容　：本事業では、以下の 2 種類のイベントを行った。

1.「水族館×VR×病院　Virtual えのすい　～だれでもどこでもいっしょに深海探査～」

昨年開発した体験型 VR プログラムのオンライン化をすすめ、病院や公益財団法人の協力を得て、リモートでの VR プログラム上映を 4 回行った。また、同じ空間での通常 VR 上映についても、重度障がい児の支援施設で水槽展示と併せたイベントとして 10 回行った。

◇VR プログラムのオンライン上映

1 回目：2024 年 1 月 22 日、川越南公民館にてリレー・フォー・ライフ・ジャパン川越実行委員会、かわごえ緩和ケアネットワークが開催した「がんサロン川越」で集まったがん患者の方々を対象に、リモート VR 上映を実施した。

2～4 回目：2024 年 3 月 6 日、埼玉医科大学総合医療センターにて、儀賀理暁医師の協力を得て、がんの進行した 3 人の患者様に対して、水族館と病室を繋ぎ、リモート VR 上映を行った。

◇VR プログラムの通常上映

2024 年 4 月 13 日、木県宇都宮市にある重度障がい児とその家族の支援施設「うりずん」で、VR プログラムの通常上映 10 回と水槽展示を行った。利用者とその家族合わせて 86 名が参加した。

2.「水族館×漁協×一流シェフ　Bistro えのすい　～ふじさわサステナブルレストラン～」

2023 年 10 月 15 日、新江ノ島水族館にて、NPO 法人江ノ島・フィッシャーマン

ズ・プロジェクト、一般社団法人 Chefs for the Blue、藤沢市、井出農園、リッチフィールド株式会社、長後製パン株式会社の協力を得て、地元江の島で採れた魚を使用して、漁師、シェフ、水族館職員で江の島の今を考えるクロストークイベントを併催する食事イベントを実施した。
これらの二つの活動を通して、水族館とは異なる「異分野と融合」することによって、水族館から物理的、精神的に“遠い”世界にいる方々に対して 、「地域の海　江の島」にまつわる魅力を届け得る新たな海の学びを創出した。

⑧

名称　：茅渟の海と鳰の湖・なかをとりもつ淀川の流れ

主催者　：結 creation（きしわだ自然資料館）

実施時期　：2023 年 3 月 15 日～2023 年 10 月 31 日

場所　：活動①
琵琶湖（瀬田川、沖島）、淀川（庭窪ワンド、城北ワンド）、亀岡盆地、大阪湾（岸和田漁港、阪南 2 区人工干潟、せんなん里海公園、城ヶ崎海岸、成ヶ島他）、滋賀県立琵琶湖博物館
活動②
岸和田漁港・きしわだ自然資料館・南海浪切ホール・道の駅愛彩ランド（以上大阪府岸和田市）・池上曽根弥生学習館（大阪府泉大津市）・府立弥生文化博物館（大阪府和泉市）・大阪市立自然史博物館（大阪市）・高槻市立自然博物館（大阪府高槻市）・高島市立今津北小学校（滋賀県高島市）・瀬田漁港および堅田漁港（滋賀県大津市）・矢橋帰帆島（滋賀県草津市）
活動③
きしわだ自然資料館・滋賀県立琵琶湖博物館・大阪市立自然史博物館

内容　：【全体内容・目的】
・「水と人との関わり」「流域から海へのつながり」をテーマに、琵琶湖（鳰の湖）・大阪湾（茅渟の海）、そして、それらをつなぐ淀川で、体験型の学習や現地見学の実施を通じ、参加者やスタッフが身近な海とその周辺環境に関する系統的な知識と経験の両方を得ることを目指す。
・大阪湾・琵琶湖・淀川「生物」「地学」「民俗または産業」をテーマに、具体的な項目の検討と、安全管理を兼ねた安全管理を兼ねた現地の事前調査を行い、ワークショップのプログラムを作成する。
・本事業の関係者による活動成果発表を支援し、実施することで、琵琶湖・淀川・大阪湾関係者のネットワークの構築を行う。また、本事業の成果を冊子にまとめ、図書館を含む各所に配布することで、さらなる連携の広がりを試みる。
【活動①　題材の検討およびプログラム開発】
・淀川水系、大阪湾は私たちにとって身近な存在であるが、環境や生き物の多様性について学ぶ機会はごく限られている。また流域全体から海へのつながりを考える時、地域の持つ多様性を知ることは重要である。
・本調査では、貝類に焦点をあて流域の生物多様性を明らかにすることを目的として、琵琶湖、淀川、大阪湾各地で採集を行い、水系ごとで貝類の標本作成を行った。
【活動②　現地見学を含む体験型学習会】
・続講座では琵琶湖・淀川・大阪湾で立案したプログラムを実施するとともに、大阪湾岸で琵琶湖や淀川の貝類紹介や、琵琶湖で大阪湾のチリメンモンスター紹介など、地域をつなぐ行事を行い、身近なフィールドと他の水系との繋がりを体験しながら学び、身近な場所から視野を広げることを目的とした事業を

行った。
【活動③　活動成果発表とネットワーク構築】
・市民活動成果の場を活用して、今回の活動を報告することで、新たな機関との連携を促進する。
・今回の活動成果冊子を作成し、図書館をはじめとする各所に配布することで、新たなネットワークづくりのきっかけとする。

⑨

名称　：「海の体験学習」ユニバーサル化基盤整備事業

主催者　：特定非営利活動法人くすの木自然館（重富海岸自然ふれあい館　なぎさミュージアム）

実施時期　：2023 年 6 月 1 日～2024 年 2 月 29 日

場所　：重富海岸自然ふれあい館なぎさミュージアム・重富海岸

内容　：今回の事業では、障害があることで海に行くことや、海で遊びたいけれど遊ぶことが難しいと思っている当事者やその家族が「どうすればそれができるのか?」を一緒に考え、サポートできる人材を育成することで、海にふれることのハードルを低くする体制を作ることを目的とした。
海に親しみ触れ合う機会を選択肢にすら入れることがない人たちが、今回の事業を通し海への親しみや、また海で遊びたいと思ってくれることで海を大切に思うきっかけを作ることができた。
サポーターとして関わる人たちへも海への学びを知ってもらうことができた。
今後も、この取り組みを持続可能に行うためには、資金面の問題やサポーターを増やす、道具を増やすなどの課題がある。

⑩

名称　：世界初となるラブカ・ミツクリザメの全身骨格標本を用いた動物レクチャーの運営

主催者　：鴨川シーワールド

実施時期　：2023 年 9 月 30 日～2024 年 3 月 24 日

場所　：鴨川シーワールド内マリンシアター（ベルーガパフォーマンス会場）

内容　：深海から採集される生物は水圧や網による擦れなどで捕獲時の状態が悪かったり、そもそもの生体情報も少なく飼育が困難な生き物も多い。ラブカやミツクリザメの飼育は非常に難しく状態がよさそうな個体でも搬入してから長くて 10 日程度しか飼育ができていない。今回、飼育が非常に困難で展示ができておらず来館者に見て頂くことのできないラブカ、ミツクリザメの標本を用いることで来館者に興味を持たせ、レクチャーを行なうことで深海の多様性や飼育をとおして「海」より関心を持ってもらうこと目的とした。ラブカ、ミツクリザメは骨などの水分量が多いため標本の作製は非常に困難である。標本の作製にあたっては 2019 年に世界初となる当館所有のメガマウスザメの全身骨格標本を作製した株式会社　吉田生物研究所に依頼した。ここのオリジナル特殊技術プラスティネーション加工により難しい標本の作製が可能となった。これによってめったに見ることのできない生きている状態に近いラブカ、ミツクリザメをよりよく来館者に知っていただくことができると考えた。

⑪

名称　：「海の学び」からはじめる持続可能地域を目指したソーシャルイノベーション」

主催者　：真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)

実施時期　：2023 年 5 月 30 日～2024 年 3 月 30 日

場所　：真鶴町立遠藤貝類博物館

内容　：1. 持続可能な海辺利用を目指した地域づくり

・「海に学び海に親しむ場づくり」協議会

町民センター（10 月 16 日、2 月 19 日、3 月 27 日）

・海辺の利用ルール策定に向けた役場内ワーキンググループ

真鶴町民センター（10 月 16 日、2 月 7 日、3 月 18 日）

2. 地域で考える海の学びとまちづくり

・海まちラボ海トーク

真鶴町民センター（12 月 12 日、1月 16 日）

・大人向け臨海実習

横浜国立大学臨海環境センター（11 月 19 日、11 月 21 日）

・大人向け磯の生物観察

遠藤貝類博物館/三ツ石海岸（3 月 13 日）

・海辺の持続可能利用に向けたシンポジウム

町民センター（3 月 17 日）

・町内組織団体と連携した研修の実施

横浜国立大学臨海環境センター（2 月 28 日）

遠藤貝類博物館/三ツ石海岸（3 月 11 日）

3. 持続可能な海の学びと地域活性化

・海辺利用のルールや SDGs の理解浸透を図る一般向けイベント

真鶴港魚座/真鶴町観光協会2F 里海ベース/遠藤貝類博物館

三ツ石海岸

（10 月 8 日、11 月 11 日、2 月 18 日、2 月 25 日、3 月 3 日）

⑫

名称　：パンダが食べ残した竹で製作する「アオリイカ産卵床」

主催者　：株式会社アワーズ

実施時期　：2023 年 6 月 14 日～2024 年 5 月 31 日

場所　：白浜町、和歌山南漁業協同組合、アクアマリンシラハマ、エルマールダイビングスクール、ミスオーシャンダイビングサービス、白浜中学校

内容　：〈経緯〉

アドベンチャーワールドでは、循環型パークとして、紙・プラスチックの利用削減・アップサイクルなどの廃棄物「ゼロ」に取り組み、資源の循環、環境負荷低減に取り組んでいます。当パークで飼育しているジャイアントパンダは竹を主食としますが、気に入った竹しか食べないため与える量の 2/3 程度は廃棄となり年間約 100t の竹を焼却処分してきました。2019 年より「パンダバンブープロジェクト」としてパンダが食べない竹を有効資源として活用すべく、様々な活動に取り組んでまいりました。2020 年からは地域の皆様や地元のダイビングショップの方々と海を綺麗にするビーチクリーンの活動なども行っています。一見綺麗な白浜の海ですが、活動していく中で見えてきた様々な課題の問題解決、海の豊かさを守る活動として、パンダが食べ残した竹を使って「アオリイカの産卵床の設置」を開始しました。

〈ねらい・目的〉
白浜の海の環境課題を知るきっかけを作り、地域の皆様と環境を回復させる取り組みを持続的に行い人と動物と自然の多様性・持続性に満ちた、よりよい社会の創造に貢献し、100 年先の未来へと贈り継ぐためのアクションが「アオリイカ産卵床設置」の目的です。
〈活動の内容〉
今年度は白浜の海 3 か所（白良浜沖、円月島付近、伊古木漁港区域内）にパンダが食べ残した竹を使って製作したアオリイカの産卵床を設置。産卵床は地元の白浜中学校の生徒約 40 名と共に製作しました。設置を通して本取り組みに参画することで、地元の海の課題を学ぶ機会を提供いたしました。

(3)プログラム 2「海の博物館活動サポート」B コース博学連携活動への支援
（申請：5 団体 5 事業、支援実施：4 団体 4 事業）

①

名称　：南極海洋プランクトン樹脂封入標本観察ワークショップキット No.2の開発と実践
主催者　：大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立極地研究所
実施時期　：2023 年 5 月 1 日～2024 年 3 月 29 日
場所　：国立極地研究所 南極・北極科学館他
内容　：2021 年度に本支援事業により製作した南極海産動物プランクトンの樹脂封入標本を用いたワークショップキット No.1 の使用を通して、参加者からのヒアリングで集積した要望に応えるため、より充実したキットを目指して新たな教材「ワークショップキット No. 2」を開発した。「食べる食べられる」の食物連鎖を直に観察できるプレパラート型の樹脂標本を開発するとともに、タブレットを用いた授業が主流になりつつある教育現場に対応するため、電子版ブックレット（解説書）を作成した。ファイルは PDF 形式とし、幅広い年代が学べるようにルビ入りのファイルも作成した。様々な現場で活用するために、WiFi 搭載型の生物顕微鏡およびタブレットを整備した。南極・北極科学館でのサイエンスカフェをはじめ、教育現場や小規模ワークショップで使用された。

②

名称　：ICTでもっとつなごう特別支援学校と海・水族館
主催者　：公益財団法人しまね海洋館（島根県立しまね海洋館）
実施時期　：2023 年 4 月 1 日～2023 年 12 月 31 日
場所　：島根県立しまね海洋館アクアス他
内容　：来館や観察会参加が困難な島根県内特別支援学校の児童・生徒を対象に、ICT技術を活用して海を学ぶオンライン中継プログラムを実施した。令和3年度から継続している中で、今年度は通信環境・音響を改善して中継の質を高めることにも取り組んだ。またオンラインの強みを活かし、複数の特別支援学校をつないで協働的な学びとなるよう、学び合うプログラムを実施した。
また、特別支援学校向けに実践してきたプログラムで得られた経験やノウハウを活かし、水族館の生物や島根の海をより身近に感じてもらえるよう、①引きこもり・不登校等支援組織向けと②遠隔地での一般観覧者向けに内容をアレンジしてそれぞれオンライン中継を開催した。

③

名称　　：海辺から支える学校教育での 「海の学び」

主催者　　：真鶴町（真鶴町立遠藤貝類博物館）

実施時期　：2023 年 5 月 15 日～2024 年 3 月 25 日

場所　　：海の学校体験学習の実施場所
・真鶴町立遠藤貝類博物館
・三ツ石海岸
・横浜国立大学臨海環境センター
・琴ヶ浜海岸
・おおがくぼ海岸

出前授業の実施場所

・星槎国際高等学校	2023 年 5 月 15 日（月）
・藤沢市立滝の沢小学校	2023 年 5 月 16 日（火）
・田園調布学園中学校	2023 年 5 月 31 日（水）
・小田原市立山王小学校	2023 年 6 月 14 日（水）
・茅ケ崎市立鶴が台中学校	2023 年 6 月 15 日（木）
・小田原市立新玉小学校	2023 年 7 月 10 日（月）
・早川公民館	2023 年 9 月 30 日（土）
・真鶴町立真鶴中学校	2024 年 2 月 29 日（木）
・真鶴町立まなづる小学校	

内容　　：1. 海の学校事業
この事業は真鶴の豊かな海を活用した学校をはじめとする教育団体向けの教育普及事業である。令和 5 年度は、26 団体、合計 1,127 人を対象に磯の生物観察・プランクトン観察指導等を行った。この海の学校事業の学習効果を高める目的で事前・事後学習として出張授業を並行して実施した。
2. 海の学校機能強化
a. 主に「海の学校」を利用する小中学校等を対象に、出張授業により事前・事後学習を実施し、「海の学校」当日の生物観察に目的意識を持たせ、学習視野を広げる機会を提供する。プランクトン観察、海及び海の環境問題に関するレクチャー、学校周辺の海岸での実習等を出前授業として実施した。本事業の対象として、9 回、合計 876 人を対象に出前授業を実施した。
また、「遠藤貝類博物館海の学校運営等委託事業」経費の対象として、真鶴町・湯河原町での出前　授業と合わせると合計 21 団体 1340 人を対象に出前授業を行った。
b. 学校用教材の開発
「海の学校」及び出前授業で使用する標本やスライドを作成する。そのための情報収集を主に町内で行う。事前・事後学校での学習やまとめなどに利用できるように、真鶴の磯でよく観察される普通種を中心に 200 点以上の画像・動画データを収集した。同じ個体でもいくつかの角度や部位の画像も含めた。今後、博物館利用校に限り、データベースにアクセスが可能となるような方法で公開する。
c. 海の環境問題等に関するパネル展示物及び館内ワークシートの作成
野外での体験学習と館内での学習とを結びつけることで、「海の学び」の定着を目的として、新たに海洋に関する環境問題の展示パネル（A1 サイズ）や館

内見学の際に利用するワークシート（A4 両面 1000 枚×2 種類）を作成した。
d. プランクトン観察シートの作成
相模湾で見られる動植物プランクトンの主要な種やグループに関して、顕微鏡観察時に観察しているプランクトンの種名やグループ名が簡単に調べられるように、顕微鏡写真を用いたプランクトン観察シート（A4 両面 1,000 枚）を作成した。
e. 海の学校アンケートの実施
海の学校に関する満足度や様々なニーズ、そして今後の利用者負担への反応を探ることを目的として、海の学校利用団体等に対しアンケート調査を行った。
アンケートは本年度海の学校を利用した団体の担当者、21 団体を対象、17 団体から回答を得た。海の学校体験活動の満足度について調査した項目では、全体の 72.7%が非常に満足したとの回答を得た。海の生物や生態系、環境についての学びの有無についても、非常に満足したとの回答が 54.5%と、半数以上から期待以上であったとの評価を得た。継続利用の希望の有無については、回答いただいた全ての担当者からまた利用したとの評価をいただいた。
体験プログラムの利用者負担に対する項目では、体験プログラムについて参加料が生じても継続利用したいとの声を多く得た半面、交通費等の関係があり費用を抑えたいという意見もあり、今後の料金設定を慎重に検討してく必要がある。
f. 町立遠藤貝類博物館受入体制拡充
折り畳みイスや大型モニター等の設備を拡充することで、海の学校の体験活動について、これまで以上に充実した受け入れ態勢を整備した。また、iPad を導入し生き物の解説や館内での学び等に活用することで、より良い海の学びに繋げることを目指した。

④

名称　：博学連携による次世代育成プロジェクト

主催者　：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ（青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸）

実施時期　：2023 年 6 月 1 日～2024 年 2 月 29 日

場所　：青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸、青森市油川地区、縄文の学び舎・小牧野館、青森駅前ビーチ

内容　：青森市地区では、2022 年から青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸を中心に「あおもり駅前ビーチ」をフィールドとして活動する市内の五つの博物館と青森市教育委員会が参画した青森「海の学び」博物館連携活動プロジェクト運営協議会を組織化し、地域の次世代を担う子ども達に地域・郷土について学ぶ機会の創出を目的に活動している。
本プロジェクト運営協議会の活動として、「青森市教育委員会」協力の下、本格的な活動とあわせて地域の産官民が連動するイベント「青森港４００年」へ参画し、学校教育現場との連携により、地域の次世代を担う若者が中心となって活動できる場を創出する。
4つの活動プログラムの実施を通して、「海の学び」をテーマに自治体と地域の博物館が連動・協働し、特に学校と博物館との連携を活発化する事で、学校教育における地域学習の一環として、地域の資源でもある自然環境と社会環境、歴史と現状を学ぶ機会を創出するために、博物館がサポート役を担い、今後の博学連携活動の継続と更なる展開と、地域の次世代を担う若者の人材育成を大きな目的の一つとして実施する。

(4)プログラム 3「海の学び調査・研究サポート」への支援
（申請 6 団体 6 事業、支援実施:5 団体 5 事業）

①

名称　：宮崎県周辺海域におけるクラゲ・ウミウシ・サンゴ類の分布及び生態と環境保全教育プログラムの構築

主催者　：宮崎県総合博物館

実施時期　：2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

内容　：宮崎県周辺海域に生息するクラゲ・ウミウシ・サンゴ類の生態分布調査を行った。クラゲ・ウミウシについては、宮崎県内に専門家がいないため、かごしま水族館の西田氏や築地新氏、久保氏らの協力のもと、飼育から生態までをレクチャーしていただいた。それらをもとに、子どもたちの授業や海での観察で使えるハンドブック製作の参考とした。サンゴ類については、宮崎大学の深見教授からの監修をいただいた。また、今回の調査研究内容を次年度の企画展「毒モンスター水族館」へ生かすため、ウミウシ類資料の保存については、きしわだ自然資料館の柏尾翔氏や奈良女子大学の北詰氏の協力もいただくことができた。ウミウシの樹脂標本は、日本ではほとんど見られないため、今回の調査研究により、その標本が製作できることとなり、今後の展示に大いに役立つものとなった。さらに、柏尾氏や北詰氏からは、博物館講座の「ウミウシ観察会」や「チリメンモンスター講座」で宮崎へ講師として招待して実施してもよいという返事もいただき、海の学びコーディネーター同士の連携も図ることができ、貴重な機会となった。

調査・研究したことを博学連携のため、各学校で役立つ授業支援のワークシートの製作を行い、それを活用した授業を実施することができた。（宮崎市立大宮中学校・都城市立西中学校）さらには、机上の理論だけで終わらないようにするため、授業後は、オンラインアンケートを用いて、子どもたちの考えを集約し、振り返ることができた。とくに、興味・関心の低かったウミウシについては、各学校へ水槽とウミウシの生体を期間限定で博物館から貸出しをすることにより、授業の時間だけでなく、いつでも観察できるようにすることで本物に触れる機会を格段に増やすことができた。その結果、ウミウシの神秘性や多様性など子どもたちの生き物や海に対する関心・意欲を高めることができた。

②

名称　：余市湾を中心とした「海の歴史」学習プログラムの構築に係る基礎的研究―「林家文書」からみるヨイチ場所における近世場所請負制度の様相―

主催者　：余市町教育委員会（余市水産博物館）

実施時期　：2023 年 4 月 1 日～2024 年 4 月 26 日

内容　：1.目録作成に係る資料台帳及び資料と目録一覧との照会、資料調査、目録作成及び資料活用のための文書の写真撮影作業を目的として、余市町水産博物館所蔵分資料デジタルカメラを用いた資料写真の撮影を行った

【余市町所蔵史料調査】

日程：2023 年 12 月 25 日～12 月 27 日

場所：余市水産博物館

内容：余市水産博物館所蔵史料のうち仮目録Ⅳの一部及び新規寄贈林家所蔵写真について調査を実施した。

2.他施設所蔵「林家文書」の調査・写真撮影作業を目的として、 宮城学院女子大学所蔵「林家文書」の調査を行い、本町の「海の歴史」に関する部分のデジタルカメラを用いた資料写真の撮影を行った。

【宮城学院女子大学所蔵史料調査】

日程：2023 年 10 月 26 日～10 月 28 日

場所：宮城学院女子大学

内容：宮城学院女子大学では、全 17 点の史料について調査を実施した。

3.「海の歴史」に関する内容の抜き出し、翻刻等の調査研究を行い、その成果を『余市水産博物館研究報告』に公表した。また、「海の歴史」の成果の公表と学習プログラムの構築準備としてプログラム案を併せて公表した。

③

名称　：地域の関係機関等と協働した海岸動物学習プログラム作成と運用に向けた具体的取り組み

主催者　：ミュージアムパーク茨城県自然博物館

実施時期　：2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

内容　：海岸動物学習プログラムの運用に向けた課題を知るため、アクアワールド茨城県大洗水族館、公益財団法人 水産無脊椎動物研究所、地球レーベル等と連携し、ひたちなか市の磯で動物の観察会を試行的に 3 回実施した。1 回目の観察会「磯の生きものを観察しよう」では、ミュージアムパーク茨城県自然博物館が主催となり、2023 年 5 月 20 日に平磯海岸で開催した。8 名の関係者がそれぞれ専門とする動物群の解説を行い、参加者は 19 名（大人 12 名、子ど

も 7 名＜小学生＞）であった。10 の動物門 40 種以上の動物が観察でき、有意義な観察会となった。子どもはすべて小学生であったため、小学生でも理解できるやさしい解説をするよう心がけた。観察会ではレジュメの他に「磯の動物ビンゴ」を作成したが、参加者の反応もよかったため、今後、改良して活用していきたいと考えている。2 回目の観察会「磯の生き物観察会 2023」では、地球レーベルが主催となり、2023 年 5 月 21 日に磯崎海岸で開催した。7 名の関係者がそれぞれ専門とする動物群の解説を行い、参加者は 41 名（大人 21 名、子ども 20 名＜幼児も含む＞）であった。20 種以上の動物が観察でき、有意義な観察会となった。未就学児が多かったため、感覚的に子どもが関心をもつような解説を心がけた。暑かったこともあり、採集した生き物が弱ってしまったため、今後は生き物が弱らないようにするための対策を講じる必要があると考えている。3 回目の観察会「磯の観察会 in ひたちなか平磯海岸」では、公益財団法人 水産無脊椎動物研究所が主催となり、2023 年 6 月 17 日に平磯海岸で開催した。7 名の関係者がそれぞれ専門とする動物群の解説を行い、参加者は 26 名（小学生 5 名、中学生 2 名、高校生以上 19 名）であった。20 種以上の動物が観察でき、有意義な観察会となった。対象が中学生以上だったため、落ち着いた雰囲気の中での開催となった。詳しい解説を心がけたためか、感想文を読むと、生き物の解説がよかったという感想が多かった。

また、観察会実施や「茨城の磯の動物ガイドブック」PDF 版作成の準備のため、ひたちなか市の海岸（平磯海岸、磯崎海岸）で調査を 4 回実施した。観察会の下見をするため、平磯海岸に行った他、磯崎海岸に 3 回行き、イソギンチャク類、コケムシ類、貝類、小型・大型甲殻類、ウニ・ヒトデ類、魚類などの撮影と標本の収集を行った。

さらに、「茨城の磯の動物ガイドブック」PDF 版を作成するため、関係者で 4 回打合せを行った。観察会に関係する漁業共同組合で打合せを行った他、オンラインやミュージアムパーク茨城県自然博物館で編集会議を 3 回実施した。

④

名称　：山口県日本海の特記的生物に基づく現代版「妖怪」の創作
～萩博物館 2024 海の妖怪展に向けて～

主催者　：萩博物館特別展・企画展開催実行委員会（萩博物館）

実施時期　：2023 年 5 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

内容　：萩博物館は 16 年前より生物や海をテーマとした親子向けの夏期特別展を開催し、身近な自然や海の魅力・課題を楽しみ学んでもらうと共に、夏の親子向け萩観光の機会を提供してきた。しかし、近年は他の施設・行事との競合にさらされ、コロナ禍によるファミリー層の野外・県外への流出もあり、夏期特別展ひいては萩博物館のプレゼンスが低下してきている。そこで、2024 年に萩博物館が開館 20 周年を迎えるにあたり、かつてより夏期特別展の来場者アンケートにおいて要望が多く集客が期待される「妖怪」と、以前から萩市を含む山口県日本海にしばしば出現し内外から注目を浴びてきた珍魚・怪魚（特記的生物）を関連づけ、「海の妖怪」をテーマとした特別展を開催することを検討している。この展示会の実現のためには、展示紹介する標本の収集・整理・制作や、それと海洋環境の異変や妖怪・怪異を関連づけた展示コンテンツや付帯事業の道筋づくりなど、事前に取り組んでおかなければならない作業が多数ある。これらの準備を確実に行うため、本事業では下記の取り組みを行った。

・近海で採集された多数の海洋生物から、2024 海の妖怪展において展示紹介

する意義のある種類を選定し、関連する標本を収集・整理・制作する。
・上記作業で認識した特記的生物および海の異変（海洋環境の変化）をモチーフに、学校の生徒を対象とした授業において現代版の妖怪を創作する。
・海の異変や特記的生物をモチーフに妖怪を創作して描くことのできる手順を記したワークシートを考案し、上記の学校の生徒での授業で試行し、2024 海の妖怪展の付帯事業や学校の理科学習や共同学習などでも活用できるように調整する。

⑤

名称　：水族館での教育プログラムへの活用に向けたサンゴ胚を用いた育成計画と着底調査

主催者　：㈱谷木材商行 大浜営業所（奄美海洋展示館）

実施時期　：2023 年 7 月 1 日～2023 年 9 月 20 日

内容　：大浜海岸におけるサンゴ礁調査（水温、水深、透明度、被度、生育型、白化率、テーブルサンゴの大きさ、加入度、オニヒトデの数）とスポットチェック法の用いた調査。
調査地は大浜海岸の礁池、礁原、礁斜面各 3 地点計 9 地点の調査。
目視と撮影した画像を元に各項目の記録をとった。
飼育下におけるサンゴの着底実験を行うために水槽内 50×50×50 水槽 2 基に着底用のセラミック製のプレート設置。
サンゴの幼生を誘引させる為にプレートに石灰藻を定着させた。
7 月 10 日奄美群島 与路島でサンゴ類のスリック（卵、幼生の帯状集合体）を一部採取。
卵、幼生を観察し水槽内で放流し着底まで1～2 週間経過観察を行なった。

(5)「海の学び特別サポートプログラム」への支援
（申請：0 団体 0 事業、支援実施：0 団体 0 事業）

9. 各サポートプログラムの実施成果詳細：

(1)プログラム 1「海の企画展サポート」への支援
（支援実施：12 団体 12 事業、入場者数合計：1,074,286 人）

①

主催者　：蘭越町貝の館

入場者数　：2,098 人

成果　：1.事業全体の成果
蘭越町貝の館において、2019 年に本プログラムを活用して、海洋プラスチックゴミに関する企画展を行い、現在まで情報発信を続けています。今回の事業では、自ら採取したゴミの分析を高性能の機械を用いて行うことで、質の高い体験型の企画展となり、多くの人に海の環境について考える良い機会となりました。引き続き、環境問題の解決につながる人材育成に繋げられるよう、事業を進めてまいります。
2.事業全体の改善点
事業の参加者には、海洋ゴミ問題の重要性について伝わったと考えていま

す。他の博物館やその他機関において、マイクロプラスチックゴミの漂流時間の推定や付着している物質について調べられる機会は多くありません。しかしながら、本事業への関心が薄く、来館者が少なかったことが改善点です。
3.改善点に関する要因と対策
「ゴミ」というネガティブなイメージが来館者を見込めなかった要因と考えます。したがって、本事業や環境問題に対するインパクトのある PR をして、少しでも多くの人の目に留まり、関心を集めることが重要と考えます。

②

主催者　：公益財団法人ふくしま海洋科学館（ふくしま海洋科学館）

入場者数　：402,039 人

成果　：1.事業全体の成果
本企画展は、飼育員の仕事や工夫を通して、水族館が日頃得ている海の学びを観覧者と共有し、海について学び、海を守ることの大切さを実感できる事業とした。
特に重視したのは体験である。飼育員が普段使用している道具を展示するだけでなく、ほとんどの展示を触ることができることができるハンズオンとした。また、実際にその道具を使用している飼育員のコメントを解説パネルに盛り込むことにより、道具に隠された生物の生態への配慮や生物の命を守るための工夫を紹介した。更に、飼育員が行っているフィールド調査、野生生物の保護など、水族館内にとどまらない活動を紹介し、近年変化している自然環境について、環境が健全であることが重要で、保全に配慮することが必要であることを考えるきっかけを提供した。付帯事業ではこの点を重視した活動を行い、生物や環境に配慮した次世代の育成を心がけた。
また本企画展では、特定の飼育員をメインキャラクターとすることにより、飼育員ひいては水族館を身近に感じてもらい、疑問に思ったことを質問したり、体験企画に参加したりしやすい環境をつくることを目指した。ねらい通りコミュニケーターとしての役割を果たし、子どもから大人まで来館者から生物や海への関心を引き出し、海についてより深い学びを得ようとする人を増やすことができた。
2.事業全体の改善点
飼育員のお仕事体験を目的に、トラックのモデルを設置したが、想定よりもスロープの傾斜が急なため、設置後安全対策が必要となった。また、展示室内に幼児を想定し、遊びながら学べるトラックのモデルを活用した搬入体験ゾーン、模擬魚釣り体験を用意したが、生物による道具の利用の仕方までは理解していないことがあるようだった。
パネル展示や道具の展示のみでハンズオンが少ないゾーンは、観覧時間が少ないようであった。
展示に関するクイズを実施したが、正解するとカードがもらえるため、カードをもらうため子どもの代りにクイズを解いている保護者が見受けられた。
付帯事業では、応募が集まる企画とそうではないものに大きく分かれた。特に会期前半に実施したものは、応募数が少なかった。川の観察や磯の観察も本事業内で実施予定だったが、川の状況や潮の状況により開催日程が早まったため、急遽別のプログラムに切り替えた。
3.改善点に関する要因と対策
トラックや釣りの体験ゾーンで遊ぶだけになってしまうのは、保護者への訴求

が不足しているためと考えられる。その場所で来館者アンケートをとってみると、「アンケートに答える」という行為から海の学びについて認識することにつながっていたようだった。今回は、ボランティアが常駐している場所であったため、アンケートを積極的にとったり、コミュニケーションを図ったりすることによってより良い学びが提供できたのではないかと考える。

観覧時間が少ないエリアは、給餌を紹介しているエリアだった。Web 用に制作した動画は閲覧数が高く、飼育員目線の動画であったため、動画で紹介すれば関心を引くことが可能であった。また、会期が始まってから要素を増やすことにより次々に展示が充実してくる姿も見せられたと思われる。

クイズについては、今回に限らずこれまで実施してきたクイズイベントでも、子どもが答えを考える前に親が答えてしまう様子が見られた。定期的に問題は変更していたが、そのようなアプローチではなく、年齢ごとのクイズを用意し子どもも親も楽しめる工夫を取り入れる必要があった。

付帯事業については、地域のイベントに重なり参加者が集まりにくい日を選んでしまったこと、企画が浸透する前の実施だったため周知が徹底されていなかったことが大きな要因である。今後は企画展示会場をつくるだけでなく広報も重視して事業に取り組む必要がある。

③

主催者　：千葉県立美術館

入場者数　：7,768 人

成果　：1.事業全体の成果

千葉県出身者でないアーティストに千葉県の海をテーマとした制作を依頼したことにより、全国的な視点から千葉県の海の特徴を調査し、作品として発表ができたことが最大の成果である。今後継続的に現代アーティストに海をテーマとした作品制作を依頼することにより、アーティストの個性が際立ち、多様な視点から千葉県の海を考察することができる。

オープニングセレモニーで知事とアーティストが対談したこと、また千葉学講座で担当学芸員が他の博物館研究員と共に事例発表を行ったことにより、千葉県をあげて取り組んでいる千葉県の海の文化について、美術分野からアプローチした事例としてアピールし、実績を残すことができた。

2.事業全体の改善点

新作をメインとした展示だったため、開幕ぎりぎりまで展示の全貌の広報ができなかったこと。作品の質を担保するため、リサーチに極力時間を費やしたことにより、展示作品の各トピックについて、充分な考察を深めることができたが、広報を前提としたスケジューリングをアーティストと共に共有し、より計画的で戦略的な広報が必要である。

3.改善点に関する要因と対策

展覧会企画に関する準備時間が不足していたこと。千葉県に係る多様なリサーチを行うためには、史実の裏付けや現場での風景の調査など数年スパンの準備期間があることが望ましい。アーティストの共同制作に係る企画や準備期間の不足はノウハウの積み重ねが必要であり、今後の改善により、アーティストとの協働による作品制作のよりよいスケジューリングが望まれる。

④

主催者　：新潟市水族館マリンピア日本海（公益財団法人新潟市海洋河川文化財団）

入場者数　：305,072 人

成果　：1.事業全体の成果

ハンズオンを多く導入することで多くの来館者に理解と関心を高める機会を提供することができた。「光と色」「水による光の拡散と吸収」といった科学的な内容を解説と写真のみで紹介するだけでは理解に繋げることは難しいが、ハンズオンや多方面から魚の様子を観察できる水槽により、多様な年齢層の来館者が、海の環境や海洋生物の多様性を見て触れて楽しみながら体感し学ぶことができた。付帯事業の海岸清掃や海洋ゴミを伝える体験プログラムで活用した資料は、地方イベントの出展や校外学習にも活かすことができるため今後も継続した海洋教育が期待できる。

2.事業全体の改善点

①企画展示の一部のハンズオンでは、来館者が展示の意図を理解できず、ただハンズオンを動かしているだけの状態が見られた。

3.改善点に関する要因と対策

①ハンズオンに触れる来場者の視点を理解しておらず展示の意図が伝わらなかった。対策として、来場者の視点をアシストする文章を記したパネルをハンズオンの近くに設置した。設置以降は、パネルを見ながらハンズオンに触れ、解説を理解する様子が見られた。

⑤

主催者　：豊橋市（豊橋市自然史博物館）

入場者数　：14,127 人

成果　：1.事業全体の成果

・当館初の鯨類や鰭脚類等の海棲哺乳類をテーマとした特別企画展及び記念講演会・ワークショップ等の付帯事業の開催により、海棲哺乳類の多様性とそれらが海で暮らすためにどの様に適応・進化したかを、また、当館が実施している渥美半島沿岸に漂着する鯨類の調査・収集活動の成果公開により、渥美半島沿岸や三河湾といった身近な海域にも様々な鯨類が棲息し、それらを支える海洋環境が存在することを、入場者に理解していただけた。

・貝塚出土の海獣骨や鯨類の一部を用いた加工品といった資料、捕鯨の歴史と現状等を紹介したパネルや動画の展示から、日本人が古から現在まで様々な形で海獣を利用し、それらから多くの恩恵を受けてきたことを学んでいただけたとともに、興味を持っていいただけた。

・海棲哺乳類を含む海棲生物の多様性や海洋生態系を脅かしている海洋プラスチックごみの現状と課題を理解してもらえた。海棲生物の多様性を守りつつそれらを持続可能的に利用していくためには、海洋プラスチックごみ問題を含む様々な海洋環境の問題に対して私達がどの様に対応すべきかを考えていただく契機になったと思われる。

2.事業全体の改善点

①猛暑・台風等の天候不順もあり、観覧者数が想定以上に伸びなかった。開催時期・期間の検討が必要である。

②開幕前後にブロック紙等の新聞に取り上げられたが、会期を通して広報効果が大きいテレビには取り上げられなかった。テレビに取り上げられるような

広報活動を積極的に行う必要がある。
③広くない展示スペースであったにも関わらず、鯨類やアホウドリ類の胃から出てきたプラスチックごみを含む海洋プラスチックごみに関する展示が、観覧者に大きなインパクトを与えたことがアンケート結果から明らかとなった。海洋プラスチックごみ問題を含む海洋環境への関心に対応するとともに更なる理解促進のため、より多くの展示を行うべきであった
3.改善点に関する要因と対策
①今後も天候不順の可能性がある夏季ではなく他の時期に変更するか、夏季のみならず会期を長く設定するなどの対策が必要である。
②開幕前に本市広報担当部署を通して開催告知を報道機関に周知していたため、開幕前後は報道機関に取り上げられたが、その後は SNS（旧ツイッター）を中心の広報活動であったため取り上げられることが多くなかった。今後は SNS のみならず、会期中の報道機関向けの広報活動、特に広報効果の大きなテレビに取り上げられる話題提供を随時実施すべきである。
③多くの海棲哺乳類の資料を通してそれらを育む海洋環境について興味・関心を持ってもらう予定であったため、海洋環境に直接的に言及した展示が少なかった。今後は海洋環境に言及した展示スペースが少なくとも、海棲生物の生態や行動と関連付ける等、海洋環境をより深く理解してもらうための更なる工夫をすべきである。

⑥

主催者　：鳥羽市立海の博物館（公益財団法人東海水産科学協会）
入場者数　：11,721 人
成果　：1.事業全体の成果
・日本各地の多様な伊勢エビ漁の方法・道具について学び、習性や地形を巧みに利用する漁師の知恵と工夫を知ることによって、海の生きものの生態の面白さや、日本の漁撈文化への理解を深めてもらうことができた。
・伊勢エビを使った郷土料理や、江戸時代の伊勢エビ料理を多数紹介し、日本の魚食の豊かさと海産物利用の歴史を実感するとともに、その背景にある豊かな海の環境にも目を向けてもらうきっかけにすることができた。
・長寿や幸運の象徴として、祝いの場での食事や装飾、贈り物のデザインで使用されるほか、邪を払う道具として玄関飾りに使用する地域があるなど、日本の伝統的な信仰や慣習と海産物との密接な結びつきを実感してもらえた。
・伊勢エビの資源量減少を防ぐための各地の取り組み、規制の現状から、持続可能な資源利用を目指すことの重要性や方策を学び、海洋環境保護への意識を高めることにつながった。
・当地域における海産物をテーマにした景観づくりや、みやげものの PR につなげることで、海を中心とした地域振興への貢献を果たすことができた。
・研究機関・社会教育施設・漁業者・観光関連施設など、周辺の様々な機関・団体と連携することにより内容を充実させ、海洋教育を発展・拡大してゆくためのネットワークを強化できた。
・付帯事業によって魚食の魅力や海洋生物研究の面白さ、海と日本人の信仰との密接な関係性など、多様な海の学びを提供し、将来、海に関連する研究や体験事業などに携わる人材の育成にも寄与することができた。
・本展の成果（収集した資料・情報・制作した成果物等）は地域の学校や教育委員会と情報共有し、カリキュラムの一例として参考にしてもらったことで、広

域的な海洋教育の発展、深化につながることが期待される。
・学芸員の解説やワークシート・解説パンフレットを通じて、多様な漁業の展開や魚食文化の価値、海の生きものの生態の面白さ、生活慣習のなかで果たしてきた役割、資源保護の重要性などを楽しみながら伝え、それらの継承をしてゆくことの重要性も認識してもらえた。
・本展実施のため収集した資料（映像・エビ網につく生きものの標本・展示パネル等）及び成果物（パネル・解説パンフレット・ワークシート）を改変しつつ継続的に活かすことで、博物館の常設展を充実させることができ、次年度以降の海洋教育事業を深化させる予定である。
2.事業全体の改善点
・当地域における伊勢エビ漁の解禁が 10 月 1 日からであるため、生体展示が会期後半のみとなってしまった。
・様々な漁具を展示したが、海底に網を張る刺し網漁の手法を、観覧者がよりイメージしやすくする必要があった。またその材質についてもより掘り下げて解説する必要があった。
3.改善点に関する要因と対策
・志摩半島産の生体にこだわったため、漁期の関係上やむを得なかったが、地域による漁期の違いの説明を兼ねて、柔軟に他産地の生体を早期から展示することも検討すべきだった。
・仕掛けた状態のイメージ図を作成して補足すると、より具体的にイメージできるようになる。また材質が綿などの自然素材から化学繊維へと変わったことは、海のプラスチックごみの増加とも結びつく重要な視点なので、より詳しく説明することで海の環境問題への意識が高められる。

⑦

主催者　：斎宮歴史博物館

入場者数　：2,486 人

成果　：1.事業全体の成果
　島国であるわが国において、人やモノ、文化などの交流や移動が古くから海路を介することで行われたこと、人々が航海の無事や安全などを神々に祈願していたことなど「海」との関わりがわが国にとって欠くことのできないものであったことへの気づきを促せた。また、地域に埋もれていた神事関係の一次資料の公開、地元の祭事資料の展示により地域史の再発見などのきっかけづくりとなった。
2.事業全体の改善点
　テーマが「海」と「人」と「神社」の関わりを紹介する展覧会ということで、高度に学術的な内容との印象を与えないような工夫、全会期を通した関連イベントの設定が必要である。
3.改善点に関する要因と対策
　展覧会名を含め展示内容・構成が高度に学術的という印象を与えていたと考えられ、平易で分かりやすい表現を用いるとともに、誘客のために全会期を通した関連イベントを設定するなどの工夫・配慮が必要と思われる。

⑧

主催者　：公益財団法人尼崎市文化振興財団（尼崎市総合文化センター）

入場者数　：2,106 人

成果　：1.事業全体の成果

二人の画家による魚の表現を対比型展示により考察するという「芸術的視点」と、大阪湾に接しながら海のイメージが乏しい尼崎における海と魚の魅力を発信するという「地域振興的視点」については、アンケートの来館目的で「テーマに関心があったから」という回答が半数以上を占めたことから、一定の成果を得られたと思われる。「歴史的視点」については、資料の借用先である歴史博物館の出張講座として鑑賞会を行い、歴史的な解説を加えて理解を深めることができた。「自然科学的視点」については、野外プログラムを行い、現在の尼崎における海との共生を目指す取り組みの紹介や、尼崎運河クルーズやSUP 体験などを通して実際に海や魚に触れることで、海を体感していただく機会を提供できた。野外プログラムは、いずれも本展を通じて地域の活動を知っていただく内容であったため、今回の参加に限らず、長期的に関心をもってもらうためのきっかけとなった。

また、本展の展示作品全点と展示風景を収録した図録を発行することができ、今後このようなテーマの展覧会が広がっていくための資料として記録を作ることができた。本書には、これまで書籍に収録されたことがない『尼崎産魚』に記録されている魚も前頁で掲載し、歴史資料の継承にもなるように努めた。

様々な角度から楽しめる工夫を施した本展は、来場者アンケートによる満足度が 99%と高く(大変満足 74%、まあ満足 25%)、内容的には以下のような当初の目的を達成することができた。

①魚の絵の魅力を通して尼崎近海および日本の海に棲む魚の生態やそれをとりまく環境を知るきっかけとする。

②実際には間近で観察することが難しい海に生息する魚の生態を、絵の鑑賞を通して学ぶ。

③出品作家によるトークやワークショップ、野外プログラムを通じて、現在の海の環境などを知る機会とする。

2.事業全体の改善点

広報面において、チラシ等を通常配布している美術館・博物館に加えて水族館などにも送付したが、客層の違いからか集客に大きな効果が得られなかった。また、来館者は家族連れが多かったことを考慮すると、開催を夏休みにするなど工夫が必要であった。ワークショップの参加者は学校配布のチラシをみて申し込んだ人がほとんどであったことから、学校への配布は周知に効果があったものと考えられるため、改善策としては展示だけでなく、より多くの人が参加できる関連プログラムを実施する必要性を感じた。

3.改善点に関する要因と対策

海や海の生き物、環境といったテーマを、美術作品で鑑賞するという展覧会は珍しく、来場者には好評であったが、スペースや予算の関係から、二人の作家だけで日本の海に限定した内容となったため、作品の種類・点数が限られてしまった。テーマ的には、より多くの作家、写真なども含めたヴァリエーションに富んだ展示にすることも可能であるであるため、今後は企画内容やヴォリュームを工夫し、多くの人に関心をもってもらえるような展覧会を実施したい。

⑨

主催者　：愛媛県総合科学博物館

入場者数　：13,383 人

成果　：1.事業全体の成果

・展示の入場者は13，383人で当初の来場目標数を超えることができた。

・瀬戸内海国立公園指定 90 周年を記念し、瀬戸内海をテーマに県立博物館3館が連携したほか、来島海峡海上交通センターなどの海洋に関する他組織との連携ができ、海洋教育を広める機会となった。

2.事業全体の改善点

・今回の展示では、解説パネルや映像を中心とした展示であったので、今後の同様な展示では体験型の展示物や展示解説でのスマートフォン等の端末機器を活用した展示も検討したい。

3.改善点に関する要因と対策

・資料、解説パネル及び映像を中心とした展示であったためかアンケートの一部に子供向けや体験型展示の要望があった。今後の同様な展示では対応できるように検討したい。

・スマートフォン等の端末を活用できるコンテンツを今後は、検討したい。

⑩

主催者　：宮崎県総合博物館

入場者数　：21,053 人

成果　：1.事業全体の成果

特別展「黒潮はくぶつかん」は本館が実施した過去15年間の同時期開催の展示会（無料）では 2 番目に多い入場者となった。当館が独自に行ったアンケートの結果では、展覧会の感想の四段階評価「大変良かった」「良かった」「ふつう」「良くなかった」のうち、「大変良かった」または「良かった」と答えた入場者が 95%であった事から、入場者の満足度も高かったと言える。

館で実施したアンケートでは、小学生などの低年齢層は海の生き物についての回答が多いが、年齢層が高くなると考古、歴史、民俗、地質コーナーが印象に残ったとの回答が見られた。本展覧会を通して、黒潮や日向灘がいかに多くの生物や私たちの暮らしに様々な恵みをもたらしてくれているかを知っていただくことができ、昨年度のモンスター水族館で紹介できかなった身近な海について学びを深める機会となった。

付帯事業についても、9の事業を実施し、事業全体で3，404人の参加者があった。大きな目的のひとつであった様々な関係機関と連携して事業を展開することができ、今後も海の学びをお互いに深めていける横の繋がりを広げることができた。

2.事業全体の改善点

今回の展示では、多様な生物が黒潮が流れる日向灘に生息していることを展示会場と併せてエントランスロビーにおいて、写真パネル 43 点を展示したが、写真展のコーナーには足を運ばずに帰る来館者が目立ち、十分な誘導ができなかった。2階エントランスと連携した展示を行う場合は会場内や入り口での誘導掲示を明確にする、もくしは会場内に一部展示を設けるなどの工夫が必要であった。

今回の展示会では、船の科学館のサポート受け、黒潮の海がもたらす生物の多様性や地形、地質、人々への恵みをテーマとした「海の学び」を深める内

容を盛り込んだ内容としたが、海を大事に守り、海を大切にする気持ちをもってもらう内容までには至らなかった　新聞紙を使った海の生き物の「不思議な海の生きもの」の作品展示は、小学生以下の来館者に喜んではもらえたが、昨年度のモンスター水族館で紹介したクジラの胃袋から見つかったゴミの展示や、海底に沈んでいるゴミの映像を上映など海の環境問題の学びを深める展示も必要であると感じた。

3.改善点に関する要因と対策

展示会場で満足される来館者が多く、エントランス展示の案内掲示を行ったが、部屋を分けて展示する際は、目立つ誘導掲示を行うか、展示会場での一部展示をとあわせて、別会場へ誘導する工夫を行う必要があると感じた。

今回の展示会では、新聞紙の再生やペットボトルのゴミ問題を考えてもらう機会として「海のふしぎな生き物」コーナーを設置した。小学生以下の来館者に喜んではもらえたが、昨年度のモンスター水族館で紹介したクジラの胃袋から見つかったゴミの展示や、海底に沈んでいるゴミの映像を上映など行った。今後は、更に踏み込んで海の環境問題をしっかり見せる展示を1コーナーでも入れることで、海が育む生き物の素晴らしさや人々との繋がりと併せた展示と併せて、海の環境問題の学びを深める展示構成を検討する上で必要であると感じた。今後も継続して海の魅力を伝えられるよう、今回の展覧会で作製した魚類模型、海藻アクリル標本、海の恵みを使った郷土料理模型等については、会期終了後の普及講座、アウトリーチ活動などで活用し、環境教育にも繋がる生涯学習の場を広げていきたい。

昨年のモンスター水族館で紹介できなかった海の魅力を幅広い年齢層に広げることを目標に展示構成を行った。海が身近な本県にとって海と人々の暮らしは大きく関わっており、博物館で実施する事業の中でも、重要なテーマといえる。段階的に「海の学び」を得るための次の段階となることを意識し、身近な日向灘の黒潮をテーマに事業を実施した。多方面にわたる連携先を開拓し、展示資料の借用をはじめ、生体展示、イベント企画運営に協力をいただき、これまで以上に連携を深めた事業を展開できた。今回の連携先とは今後の展示会や普及活動に参加いただくことで継続した学びが得られるように、学びの機会や種類を増やし、段階的に学べるような事業計画を検討し、今回の展覧会や付帯事業などで深めてもらった海の学びや次世代教育に対する意識の高まりを、主体的に学び続ける機会を設けていく必要がある。

⑪

主催者　：沖縄県立博物館・美術館

入場者数　：14,167 人

成果　：1.事業全体の成果

当館において海を越える人々をテーマに倭寇と琉球の交易を結び付けた内容の展示は初めての試みであり、その反響については予想ができないものであった。とくに琉球史に興味がある方が多く来館していたことから、海を介した東アジアの中の琉球を歴史的に紐解き、その知的好奇心を引き出すことができたものと思われる。

また、海を越えて最初に琉球列島へとたどり着いた旧石器時代の人類をテーマとして、展示を軸にさまざまなイベントを通じて、その内容を広く発信することができた。

2.事業全体の改善点
　展示の内容から歴史的な視点に重点が置かれていたため、歴史分野以外で海について興味を抱く内容については手薄であったように思われた。また、東アジア地域のみならず大航海時代としての内容としてテーマを広げた方が面白いという意見を来館者から賜った。この点については東南アジア並びにヨーロッパ方面との交易についてテーマを広げても良いと思われた。
そして、ヒトと海の関係史の原点である旧石器時代をテーマとした後期の事業に関しては、パネル解説文や図録の内容をもう少し噛み砕いて提示する必要があったと考えている。多くの機関や関係者の協力を得て実施された事業であったが、広報活動により力を入れることで事業の成果をより広く発信することができたと思われる。
3.改善点に関する要因と対策
　今回の観覧者からの意見として歴史的な興味は引き出すことができたが、それ以外の分野においては不十分だったと言える。より広い視点と分野を越えた海をテーマとした展示内容を今後、検討していく必要性を感じた。また、事前の資料調査においても令和 4 年度はコロナ禍であったことから十分に実施することができなかったことも要因として捉えることができる。十分な資料調査を実施してこそ展示内容が充実してくると強く感じた。
後期の展示の改善点としては、パネルと図録内容について、複数のスタッフによる十分な吟味の時間を確保できなかったことが考えられる。また、広報の主担当である指定管理者との連携が不足していたと考えられる。今後は広報活動について事前に十分な打ち合わせを持つ機会を持ち、より事業を広く発信できるように努めたい。

⑫

主催者　：国立科学博物館（独立行政法人 国立科学博物館）

入場者数　：278,266 人

成果　：1.事業全体の成果
今回新たに標本を作成し、多くの方にパネルだけでなく実物の海の生き物たちをご覧いただくことができた。また、展示した標本の中には小さな生き物も多かったが、サポートにより拡大模型の作製も行うことができたため、細かい体のつくりなどを来館された皆さまにご紹介することができた。ご来館された皆さまにたくさんの標本をより見やすくご覧いただけたことで、今まで紹介される機会の少なかった「海生無脊椎動物」を身近に感じていただき、興味を持っていただくことができたと考える。
さらに、外部機関より講師の方をお呼びして、講演会に加えて、講義・実習を行い、多くの方々に海生無脊椎動物をよりわかりやすく知っていただけるような、機会を提供することができた。
展示の構成として、中央ホールを最大限に活用することのできる展示を制作し、圧倒的なスケールで、海の中の生き物たちの多様性を知っていただくことができた。
2.事業全体の改善点
事業構想当初はたくさんの方々に海生無脊椎動物を知っていただけるよう、小型のパンフレットをなるべく多く作成する予定であったが、企画を進めていく中で、企画展の内容を網羅した学習資料を目指すこととした。結果、当初予定

よりも印刷部数は減ってしまったが、お持ち帰りいただいた方には非常に好評をいただくことができた。一方で、部数に限りがあるため希望者全員へ配布をすることができなかった。
3.改善点に関する要因と対策
今後は、パンフレットのデジタルデータ公開などを検討し、来場された方に企画展の復習をする機会を提供できたらと考える。

(2)プログラム 2「海の博物館活動サポート」A コース博物館活動への支援
(支援実施:12 団体 12 事業、参加者数合計:594,215 人)

①
主催者　: 香川県立ミュージアム(瀬戸内海歴史民俗資料館)
参加者数　: 9,266 人
成果　: 1.事業全体の成果
開館 50 周年の記念事業として実施したことで通常の当館事業に比べてマスコミ等の取材も多く、4事業の情報が途切れず連続して発信されたことなどもあり、助成事業実施中の令和5年4～11 月の来館者数(12,026 人)は直近 10 年間で最も多く、過去 10 年間の同月間平均(7,536 人)の約 160%となった。これにより、多くの方々に当館の調査研究成果や収蔵資料などを活用しながら瀬戸内海と沿岸地域の人々のくらしについて考えていただく機会となり、50 周年の節目に、改めて瀬戸内海を対象とする広域資料館としての当館の活動を知っていただくことができた。
また、外部の専門家やアーティスト、各種団体等と積極的に連携を行い、歴史・民俗分野に限らず自然や漁業、環境、芸術などさまざまな分野の視点を持ち込み、海と人の関わりについて多様な側面から捉える機会を提供することができた。それに伴って、従来の来館者層だけでなく、各分野に興味をもつ新たな来館者が訪れ、海の学びに参加いただくことができた。
これらの取組みを通して、連携した複数の団体等とも良好な関係を築くことができ、次年度の協力事業につながるなど継続的な今後の取組みが期待できる。また、近隣小学校や子どもたちとはほとんど接点がなかったが、そらあみで来館した後、ナイトミュージアムで子どもたちが家族と共に遊びに来てくれるなど、新たなつながりを作ることができた。連携団体の中でも特に香川大学創造工学部とは、4月から継続的に協力しながら事業に取り組んできたことから、次年度も後輩の学生たちが活動を引継ぎ、事業を続ける流れが生まれ、次年度も継続的に子どもたちの学びに関わる活動を続ける予定である。
2.事業全体の改善点
① 開館 50 周年の機会に合わせて、タイプの異なる4つの事業を連続して実施し、多くの連携先とも協力しながら発信力を高めたことで得られた成果がある反面、当館の人数体制でそれだけの事業を運営していくことの課題もあったと感じる。4事業の準備・実施の時期が重なっており、余裕をもった準備ができなかった事業もある。また、実施した事業の振り返りや見直しなどを次の事業に素早く反映させるのが難しかったところもあった。新たなアイデアで発展させることができた事業もあったかと思うが、その余裕を持てなかったところが反省点である。
② 内容面では、瀬戸内海と人々のくらしのつながりを学びの主軸に置いたが、民俗資料や地域社会に関わる話題などからくらしの中にある「海」をイメー

ジしてもらうのが難しかったところがあったと感じる。アンケート結果を見ても、海上交通・海の環境をテーマにしたセミナーや、海ほたるや夜の海解説があったナイトミュージアムなどに比べて、瀬戸内沿岸地域のくらしのアーカイブをとりあげたセミナーやシンポジウムでは海が直接的な話題の中心ではなかったこともあり、「海を感じたか」といった項目の数値は低かった。ただ、「海を大切と思うか」といった項目の数値はある程度あり、個別のコメントなどからもくらしの中にある海の存在を考えていただくことはできたと考えるが、人文系の資料館としてどのように海を意識する仕組みを作っていくのか、改善が必要と感じた。

③　今回は新たな試みも含めてさまざまな事業を行ったが、当館の研修室等のスペースや職員数などの限界もあり、参加できる人数を制限せざるを得なかった。当館としては通常に比べて多数の参加であったが、講師等に協力いただきながら準備した企画について、さらに多くの方々に参加いただくか、内容を知っていただけるような工夫が必要と感じた。また、参加者だけでなく、協力いただいた複数の連携先の方々も、担当事業はわかるが他は関りがないという状況があり、また連携先同士の交流の機会が充分作れなかったところがある。今後に活動を発展的に継続させていくためには、この点も情報共有のあり方の改善が必要と考える。

3.改善点に関する要因と対策

①　事業実施期間（8か月弱）内にタイプの異なる事業を多数実施したこと、いずれも新規の事業であり、かつ連携先も多かったことなどが、スケジュールがタイトになったことの要因と考えられる。50 周年という特別なタイミングで情報発信するうえでは効果があったと考えるが、今後も継続的に海の学びの事業に取り組んでいくにあたっては、年間で取り組む事業の種類と数をもう少し絞り、事業の準備に時間をかけて内容を深めていくとともに、ワークショップの回数や連携する学校数を増やすなどして参加できる人数を増やし、成果を広めることなどが有効と考える。

②　瀬戸内沿岸地域の歴史やくらしを考える上で、海は不可欠な要素であり、中山間部であっても海につながる産業や地域的なつながりがある。しかし、瀬戸内で生活する人ほどそのことを改めて意識する機会は少なく、セミナーやシンポジウムではその前提部分の説明や話題展開する上でのつなぎ方が充分ではなかったのが海のイメージとの距離を作った要因と考えられる。「瀬戸内海」や「民俗」をテーマに活動する当館としては、今後の活動においても、海と日常のくらしを結び付けて考えてもらうための工夫が必要である。船や漁撈用具など民俗資料や山間部と海をつなぐ環境や水利の話題など、具体的に想像できる話題を入口にしたり、自然系の博物館等と連携を深めるなどして改善につなげたい。

③　各事業の参加人数については、準備段階で打ち合わせなどをしながら内容や場所、スタッフなどを考慮しながら決めたもので、申請時の予定より増減はあったものの、直接参加という形では物理的な制限があった。連続セミナーは記録冊子を作成することで当日参加できなかった方々にも内容の一部を知っていただく工夫を行ったが、その他の事業においても記録集などが作成できれば、より多くの人と内容共有することができる。また、事業によってはオンラインなどを活用することで遠方からの参加も可能となり、当館のアクセスの課題にも対応できる可能性があることから、この点についても準備段階から講師等と相談しながら工夫することが改善につながると考えられる。

　連携先同士の交流については、本事業を実施しながら気づいた点であり、今回はそこまで念頭に置いていなかったのが正直なところである。今後、このよ

うな取組みを行う場合には各事業は連続するものであることから全体像の共有を図ることと、関係者のネットワークづくりも意識し、適宜交流の場を設けたり、試みとして連携する部分を追加するなど試行しながら取り組むことが改善につながると考える。事業を一過性のものにしないためにも、中長期的視点から地域の中での連携体制を充実させる視点を持つことが重要と思う。

②

主催者　：和歌山県立自然博物館

参加者数　：13,396 人

成果　：1.事業全体の成果

カニ類の標本教材を作製し、和歌山県立自然博物館の自然観察行事や館内の展示、学校訪問、他館との協働で活用することで、特に和歌山の身近な海辺環境を行事参加者等に解説し、そのすばらしさや意外な一面を紹介することができた。参加者は、普段見慣れた海辺環境であっても、観察眼を養うことができれば新たな発見があることに気付き、海辺環境を大切にする意識を醸成することができた。

また、南方のカニ類を、和歌山のカニ類と比較することで、遠く晴れた海域であっても、潮流によってつながっていることを解説し、気候変動によって将来的には生物相が大きく変化しうる可能性を示すことができた。このことにより、身近な海辺環境からよりマクロな視点で海について考えることができるようになり、生物多様性や様々な環境問題に当事者意識をもってもらうことに成功した。

教材の作製を体験してもらうことにより、自然物を手元に置くことの喜びを味わい、自然物を恒久的に得るためには自然環境を大切にするという、環境保全に対する意識を育むことができた。

和歌山県立自然博としては、当初の目的であったカニ類標本を用いた教材パッケージの作製と教育プログラムの開発は達成され、事業終了後も活用できる教材や教材の作製方法、経験情報を蓄積ることができた。

2.事業全体の改善点

本事業で最も重点的に行った標本教材製作であるが、標本の品質を生時の質感をできる限り保存する、という目標に関しては至らなかった部分が多い。標本作製において、生物が生きている時の質感をできる限り保存することは永遠かつ最大の課題である。標本教材の品質の向上は海の学びの品質の向上に直結することであり、改善点である。

また「特定の海辺環境に生息する生物としてのカニ類」という視点で教材を作製したつもりであったが、担当者の観察力不足や表現力不足により簡単な解説になってしまい、せっかくの標本教材を活かしきれなかった場面があった。カニ類の教材を用いて海辺環境の学びを深める、という点では詳細な解説をしきれないことがあった。

3.改善点に関する要因と対策

本事業の途中で、カニ類標本の品質を飛躍的に高めることに成功し、安定した品質の教材を作製できるようになったが、これを達成した時期が遅く、教材全体の品質を揃えることができなかった。しかしながら、薬剤使用料などの各種パラメーターは現在も改良を続けており、品質の向上が著しい。このことによって、よりよい教材標本の作製が可能になり、得られた技術的なノウハウによって、標本作製講座のメニューの改善も可能になる。結果として、海の学び

を深めるためのツールがより洗練されることが期待できる。カニ類を含む生物の生息する海辺環境という視点を教育者である学芸員自身が育み、伝えるということが、主担当者である松野が不十分であった。そこで、これからもフィールドへ出かけ、様々な生物が織りなす物語を読み取り、そこで得た経験情報を教材の開発や運用方法の改善に活用していきたい。

③

主催者　：青森県営浅虫水族館

参加者数　：13,500 人

成果　：1.事業全体の成果

小さな生物をまとめて展示することにより、来館者の注目を惹きつけ、関心を持ち易い雰囲気を作ることができた。解説活動により海洋の環境悪化などによって減少する漁獲量を補うために行われている地元の栽培漁業や養殖漁業の有用水産種を知り、「つくり育てる漁業」を知る場とすることができ、さらに「海に親しみ、海を知る」ための機会と次世代に豊かな海を引き継ぐためにはどうすれ良いのかを考える機会を創出することができた。また、「未来へつなぐ大切な命」の展示コーナーとしての一体感もあり、常設化することができた。

2.事業全体の改善点

このコーナーで育ち、成長した生物を館内の別の水槽で展示することにより水族館内での養殖を　完結させ、自然の海に負荷をかけない「つくり育てる漁業」をアピールすることを目指しているが、1 年目ということでまだできていない。

3.改善点に関する要因と対策

今後、新たに種苗生産された同じ種を継続して展示し、そのサイクルをつくることにより、順次館内での別の水槽での展示を増やしていく。また、館内で誕生する生物の種を増やし、このコーナーがマンネリ化しないようにする。

④

主催者　：瑞浪市教育委員会スポーツ文化課（瑞浪市化石博物館）

参加者数　：1,632 人

成果　：1.事業全体の成果

パレオパラドキシア産状レプリカを用いた出前授業や出張展示、博物館での展示解説など、本事業を行うことにより、多くの方に海の学び機会の提供を行うことができ、現在は海に面していない岐阜県が海だった頃の様子について普及を行うことができた。また、ガイドブックを新たに制作したことにより学びの質を向上させることができ、今後も継続的な出前授業やワークショップを行うことができる。

2.事業全体の改善点

蒲郡市生命の海科学館と行った YouTube の配信は多くの方が視聴したため、海の学びの機会創出にはオンラインツールや動画配信をより活用する必要があった。また、持続可能な事業とするために、学校への経常的な呼びかけや、ガイドブックを今後も市内学校に配布し、学習資料として活用することが必要だと感じた。

3.改善点に関する要因と対策

市内の多くの学校との連携を行うことができたが、一過性のものにしないよう

に今後も学校や博物館への呼びかけや、ガイドブックを増刷して配布を行いたい。また、オンラインの講座開催も検討したい。

④

主催者　：北海道立オホーツク流氷科学センター

参加者数　：77 人

成果　：1.事業全体の成果

1 月～4 月まで通常の船舶では難しい海氷期の砕氷船を使ったプランクトン採集、海洋環境調査を行い、サンプル、水温などの環境データを収集することができた。プランクトンサンプルは薬品処理するなどして今後の研究や観察会の資料とすることができた。砕氷船によるプランクトン採集、顕微鏡観察ワークショップを実施し体験的に海洋環境などの現状を啓蒙し、環境保全への意識醸成を行うことができた。クリオネ工作、環境講演会などのワークショップを実施しクリオネの特徴を学び、流氷に影響される北海道特有の気候を理解することができた。

2.事業全体の改善点

砕氷船によるプランクトン採集、顕微鏡観察ワークショップでは砕氷船でのプランクトンネット曳網時に船のエンジン音で解説の声が参加者に聞こえにくかった。またプランクトン顕微鏡観察では顕微鏡の数に限りがあったため、顕微鏡使用に待ち時間が生じた。クリオネ工作、環境講演会などのワークショップはインフルエンザの影響か参加者が定員とならなかった。

3.改善点に関する要因と対策

砕氷船でのプランクトンネット曳網時に船のエンジン音で解説の声が参加者に聞こえにくかった点はワイヤレスマイクを導入しスピーカーを参加者近くに設置することや、専門家を増員しプランクトンネット曳網作業者と別に解説者配置し参加者近くで解説を行うことなどで改善が見込まれる。プランクトン顕微鏡観察時の顕微鏡不足については顕微鏡増配の他、待ち時間に自身が観察するプレパラート標本作成するなどが考えられるがレクチャーする人員が必要となる。これらについてはマンパワーが必要なことから簡単には解決できない側面もあるが、学習プログログラムの見直しや新たなワークシートや資料の配布で改善が見込まれる。インフルエンザ蔓延による参加者減対策は難しいが、児童が外出可能な学校への再告知や近隣自治体に広報を広げるなどで改善したい。

⑤

主催者　：一般社団法人野母崎産業活性化協会（長崎市恐竜博物館）

参加者数　：148,289 人

成果　：1.事業全体の成果

シーボルト来日 200 周年という記念の年に、長崎独自の歴史や文化、地域主体のイベント等、様々なアプローチで、地元の水産資源であるタコやイセエビ等の海洋生物への興味関心を高めることができた。また、本事業を実施したことにより、自治体や博物館だけではなく、水族館や大学、地元漁協関係者、地域住民とも連携を深めることもできた。そして、地域住民による多くのボランティアにも支えられ、海洋教育や水産業を担う次世代の育成にもつながるものとなったと考えている。

2.事業全体の改善点
本事業では準備期間が短く、打ち合わせ回数も十分ではなかったため、イベントなどの実施経験が豊富な担当者の自発的な動きに頼る場面が多く、次世代の人材育成が課題と感じた。
3.改善点に関する要因と対策
課題に対しては、より多くの作業者が事業内容を早い段階から理解して共有するとともに、継続的な取り組みとなるように、次世代にも容易に継承できる作業マニュアルを作成する必要があると考えている。

⑥

主催者　：株式会社　新江ノ島水族館（新江ノ島水族館）

参加者数　：151 人

成果　：1.事業全体の成果
①「水族館×VR×病院　Virtual えのすい　～だれでもどこでもいっしょに深海探査～」
昨年開発した体験型 VR プログラムのオンライン化をすすめ、病院や公益財団法人の協力を得て、リモートでの VR プログラム上映を 4 回行った。また、同じ空間での通常 VR 上映についても、重度障がい児の支援施設で水槽展示と併せたイベントとして 10 回行った。
◇VR プログラムのオンライン上映
1 回目： 2024 年 1 月 22 日、川越南公民館にてリレー・フォー・ライフ・ジャパン川越実行委員会、かわごえ緩和ケアネットワークが開催した「がんサロン川越」で集まったがん患者の方々を対象に、リモート VR 上映を実施した。8 名の方が参加、「自分ではできない貴重な時間だった、安らぎを与えられるのが良いこと」などの感想を頂いた。
2-4 回目：2024 年 3 月 6 日、埼玉医科大学総合医療センターにて、儀賀理暁医師の協力を得て、がんの進行した 3 人の患者様に対して、水族館と病室を繋ぎ、リモート VR 上映を行った。2 名の意識のはっきりした患者様からは非常に楽しかったとの感想を頂き、1 名の意識レベルの低い方は追視の反応が見られた。儀賀医師からは、3 人の患者様の所見をいただき、VR 上映は患者様にとって、病には関係なく「普通に」過ごしていた自分を取り戻す、dignity therapy を彷彿とさせる活動であるなどのコメントを頂いた。
◇VR プログラムの通常上映
2024 年 4 月 13 日、栃木県宇都宮市にある重度障がい児とその家族の支援施設「うりずん」で、VR プログラムの通常上映 10 回とオオグソクムシ水槽展示、およびタッチイベントを行った。利用者とその家族合わせて 86 名が参加した。子どもたちとその家族対象ということで、リモートでの実施より、水槽を設置して観察や実際に触ってもらうなど、よりよい実施形態で行った。「オオグソクムシに触れるなんて中々ない機会で、本当に楽しめました、携わってくださった全ての方々に、心から感謝しております、貴重な経験を積ませていただき、本当にありがとうございました」などの感想をいただいた。
②「水族館×漁協×一流シェフ　Bistro えのすい　～ふじさわサステナブルレストラン～」
2023 年 10 月 15 日、新江ノ島水族館にて、NPO 法人江ノ島・フィッシャーマンズ・プロジェクト、一般社団法人 Chefs for the Blue、藤沢市、井出農園、リッチフィールド株式会社、長後製パン株式会社の協力を得て、地元江の島で採れた魚を使用、漁師、シェフ、水族館職員で江の島の今を考えるクロストークイベ

ントを併催する食事イベントを実施した。
地元江の島の食材を使用して一流シェフの作った料理を楽しみながら、江の島の海の「今」を知るイベントとした。参加者からは、水族館が新しい一歩を踏み出そうと模索していることが良く分かった、少しでも何ができるのかを考え行動したい、などの感想を頂いた。
これらの活動を通して、水族館業界とはやや毛色の異なる「異分野と融合」し、水族館から物理的、精神的に“遠い”方々へ「地域の海　江の島」の水族館の飼育員自らが観察、体験したありのままの魅力や諸問題について届け得る新たな海の学びを創出した。
2.事業全体の改善点
　VR イベントについて、リモートでの実施者数が目標より少なくなってしまった。一方で少なくならざるを得ない要因もあった。特に病院での実施に際しては、通常のイベントのようにこちらで設定した時間や人数に合わせて実施することが難しく、参加者一人一人に合わせたかたちで丁寧に実施する必要があることが分かった。
食事イベントについて、イベントとしては非常に盛況だった。一方で、食事の形式がフィンガーフードとなり、夜実施するイベントとしては食事の提供量が少なくなってしまった。また、食材の選び方についても、場所を江の島、時期を今に限定したことにより、入手が想定以上に難航した。
3.改善点に関する要因と対策
　VR イベントについて、特に病院での実施については参加者が少なくなることを織り込み済みで行う必要がある。一般のイベントと異なり、参加者数だけに重点を置くのではなく、参加者一人一人の状況に寄り添う姿勢が大切である。また、場合によってはリモートではなく通常上映での実施に水槽展示を併せて行うなど、より効果的な運用方法があることも分かった。
今後はより多くの方が参加していただくイベントとして、移動水族館などで VR イベントを実施する一方で、病院など一人の参加者に対して丁寧に行う VR イベントも併せて続けていく。このように二本立てのイベント計画・実施により、より多くの方に、さらにより届きにくい方に、海の学びを確実に届ける活動を行っていくことができる。
食事イベントについて、次回は時間帯に見合ったディナーとして提供することにより、さらに料理の幅が広がり、使用する食材も増えることで、さらに幅広く海の学びを提供することができる。食材の選び方についても、江の島周辺から相模湾と広げることにより、食材の入手難易度を下げるとともに、より広く地元の海や漁を知って頂く機会にもなる。

⑦

主催者　：結 creation（きしわだ自然資料館）

参加者数　：3,993 人

成果　：1.事業全体の成果
　水系全体を視野に入れた計画の中で始まった事業であったが、物理的な範囲の広さ、関連するテーマの多さ、地域によっての文化の違いなど、多様性をどのようにとらえて反映していくかが課題であった。そこで、事業を支える情報の源になるべく、事前調査にしっかり時間をかけておこなえたことがその後の発展などに繋がっていったと考えている。テーマを決めるときも、プログラムの企画をするときも、水系貝類の調査結果をベースにということでブレずに取り組むことができた。企画がブレなかったこと、関わるスタッフの数が増えても共

通認識が持てたことで、参加者へ伝えたいと考えていたことをうまく伝えられるようになったと考えている。
　まだ始めたばかりの試みではあったが、多くの方から関心を持ってもらい、参加者には次の予定などを聞いてもらえるようにもなれた。単発のイベントとしては流れも確立することができつつあり、パッケージ化しての展開も実現可能となってきている。今後はモデル事業のブラッシュアップと定着、パッケージ化をめざし、活動の継続と発展をしていきたい。
2.事業全体の改善点
　モデル事業を実施する中で、①現地での体験のキャパの関係で、大人数を一度に受け入れることができない。②遠方の開催地へも全員の負担を最小限度にして参加できる環境づくりが必要。③遠方への移動にどうしても時間がかかるため、活動時間に制限が出てしまうなど、新たな課題を得ることができた。また、あいだをつなぐ川での活動は、淀川の範囲が大変広く、河川整備が進んでいるため川の近くまで簡単に近づけないなどの問題もあり、子どもも安心して川に近づけて、生き物の生息環境としても豊かである支流の芥川を今回は選んだ。実施する地点の選択は、現状のままでいいのかを再度検討し、目標の達成に向けてより良い環境設定をする必要がある。
　また、モデル事業で企画したプログラムをアレンジして、単発のイベントでも実施できるような再整備も必要だということが分かった。
3.改善点に関する要因と対策
　改善点①は、連続講座を 2 回実施するなどで対応することは可能かもしれないが、その分関わるスタッフの人員確保を育成が必要になってくる。現場でのリーダーになる人材の育成をまずはおこない、学生は地域、博物館のボランティアを巻き込む工夫をするなどを検討していきたい。
　改善点②は、現在の社会で格差が広がる中では大変重要で、深刻な問題である。一人でも多くの人に参加してもらいたい思いはあるので、遠方へ移動する際の交通手段の検討は必要である。
改善点③は、物理的な問題であるため満足いく解決は難しいとは思う。少しでも移動時間を短縮できるために、近場でのアレンジを考えるなどの検討は必要である。

⑧

主催者　：特定非営利活動法人　くすの木自然館（重富海岸自然ふれあい館　なぎさミュージアム）

参加者数　：288 人

成果　：1.事業全体の成果
障害があることで、海に行くことが難しく体験学習の機会がないなど制限される本人や家族に、海を体験できる、親しめる体制を構築することで、「だれでも」海を楽しめる、体験するには「どうやったらできるか？」を一緒に考えサポートできる人材の育成をすることことができた。その結果、海に行くことさえも選択肢になかった人たちへ海を体験してもらう体験会を実施することができた。
いつでも海に入れる体制をサポートするためのネットワークを構築した。また、新たにネットワークに入りたいという方のための仕組みをつくり、ネットワーク参加者を増やすためのパンフレットも作成した。
今年度の体験会では身体・重複障害の方の参加のみだったが、パンフレットを見た方や、今回参加した方の知り合いなどから、発達障害や多動児の参加の問い合わせが増えた。また、持病により海で遊ぶことを医師から止められてい

る大学生からも「これなら私も友達と海に入れるかも？」と、これまで海に来ることが難しかった人々に、海で遊び学べるということを伝えることができた。
今年の体験会の参加者には、暖かくなれば自分たちも海に行けるという選択肢を持ってもらえた。来年を楽しみに待っているという声や、養護学校の友達と来年は一緒に入りたいとの声も寄せられている。
これまで、海の体験活動のユニバーサル化を考えていなかった方々に、ユニバーサル化することで、得られる多くの成果を示すことができ、他の海岸などへの活動の波及のきっかけとなった。海での体験活動が、海の保全や再生につながる「学び」になるという視点を多くの人に届けることができた。また、私たちだけでなく、サポーターに登録している人が、「学び」を伝える立場になってくれた。
ユニバーサルビーチと、その必要性を様々な人に知ってもらうことで、より海を学べる環境や親しめる環境の必要性と、障害があることで親しめない、学べない、体験できないというひとたちがいることを周知する活動ができた。
2.事業全体の改善点
・研修会ではオンライン講座も併用したがネット環境が不安定で切断されるころもあり想定外のトラブルとなった。
・オンライン参加の人には、フォームより回答できるアンケートを作成したが回答をもらえなかった人がいた。
・体験会を実施することで、1 回の体験に少なくとも 6 名のサポーターが必要なことが分かった。今回は、積極的なサポーターの参加により、毎回実施することができたが、今後を考えた際に、サポーターの不足を感じた。
・体験後にアンケート記入をおこなったが、先に帰りアンケート記入できていない人がいたためアンケート不足となった。
・パネル展示の際に、アンケート設置を失念しており回答を集めることができなかった。
・他海岸での実施を打診されたが、設備や人出などの課題があり実施することができなかった。特に支援学校がない離島での開催は、今後の課題である。離島には支援学校がない島が多く、人々が障害者と接する機会ははるかに少ない。そのため、海の学びのユニバーサル化について考えられる人が少ない現状がある。障害者と接する機会が少ない中で、福祉施設や障害者施設は存在している。施設利用の方々が外に出る機会のひとつにもなるような取り組みのとしてユニバーサルビーチの開催を検討していきたい。
3.改善点に関する要因と対策
・オンライン環境の見直しをはかる。オンライン会議のためだけのポータブル wi-fi の準備などを整える。
・オンライン参加の人へのアンケート実施方法を、フォーム以外にも LINE やメールなどで行うなど検討し期限を定めてお願いする。回答がなかった場合には複数回リマインドする。
・サポーターをさらに増やし、「できる人が」「できるときに」無理のない範囲で、活動ができるようにする。
・体験会前にアンケート記入があることを先にお伝えし、着替え後に記入の時間をとる。更衣室内に回収 BOX などを設置する。
・報告会でのアンケート記入と認識していたために、仕様書の活動内容を都度確認する。
・離島に「ユニバーサルな海の体験活動」の推進拠点を設置し、今事業で構築した体制を離島でも作れるようにしていく。また、「出張ユニバーサルな海の学び」を行えるように、パッケージ化する。

⑨

主催者　：鴨川シーワールド

参加者数　：2,824 人

成果　：1.事業全体の成果

・本サポート事業により、深海ザメのラブカ、ミツクリザメの世界初となるラブカ・ミツクリザメの全身骨格標本および全身標本を作製することができ、特別レクチャー「謎多き深海の生き物たち」を開催することができた。

・レクチャー参加目標予定数の 3,500 名（1 回あたり 62.4 名）には届かなかったものの合計 2,824 名（1 回あたり 48.7 名）の来館者に聴講した頂いたことである程度の成果が上げられたと考える。

・生きた状態で展示できないラブカ、ミツクリザメのより最も実物に近い全身標本を見せることで水族館のチャレンジや深海の多様性などを紹介することができた。全身骨格標本では体のつくりを紹介しエサのとらえ方などを紹介した。

・チラシなどの作成は行わず、ホームページや SNS などの配信で告知を行ったが、X（旧 Twitter）、では 3 万 4000 件のインプレッションがあり、Instagram では 1,547 件の「いいね」を頂くことができた。

2.事業全体の改善点

①当初予定していたレクチャー参加目標予定数の 3,500 名（1 回あたり 62.4 名）には届かなかったものの合計 2,824 名（1 回あたり 48.7 名）の 80.7%であった。

②レクチャー開始後にベルーガを観察する来館者がおり声をあげたりレクチャーに若干の支障が出た。

3.改善点に関する要因と対策

①ベルーガパフォーマンスが終わったと同時に多くの来館者が次のパフォーマンス会場に行くために移動してしまうのをなかなか足止めすることが難しかった。館内などで呼び込みをすることことで対応した。閑散期はなかなか人数を集めることが難しかった。

②看板や人を配置することで改善することができた。

⑩

主催者　：真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)

参加者数　：738 人

成果　：1.事業全体の成果

本事業では3年間に渡り、海辺の利用ルールの策定を目指してきた。期間を通じて、漁協をはじめたとした海辺のステークホルダーとさまざまな課題に向き合い、解決に向けた議論を行なってきた。今年度は、漁協、行政、町民とそれぞれ異なる立場からも海辺の課題や価値を理解し、同じ方向を向いて進んでいくための基本的な考え方の策定に力を入れた。条例の策定までには至らなかったものの、多様なイベントなどの取り組みの成果もあり、地域の海の現状と利用ルールの必要性については、「海を学び、海に親しむ場づくり」協議会から、行政、町民へと広がりを得ることに成功したと考えている。

特に、役場内部では「条例」とするのがいいか、「制定までに時間を要するため『憲章』等の形で運用し、その後の条例化が良いのではないか」など、具体的な検討を議論するような機会を得るとともに、ルールの必要性と緊急性については、かなり浸透が進んだ。途中、町長の交代や港湾地域の指定管理の交代など、大きな環境の変化もあったが、「海岸のゾーニング」や「海辺の利用ルー

ルの条例化」などについて、新たな町長から発言があるなど、役場全体で現状を放置せず、その形は定まらないもののルールを制定し、町民や観光客に示していくことが既定路線であると感じられる状態に至っている。
また、漁協に関しても、密漁者などには厳しい態度で望んでいるものの、町の観光業などに十分理解を示し、「せっかく来てくれるのだから、きちっとルールを定めて受け入れることで町の利益に繋げられれば」という立ち位置を示すに至っている。特に近年の磯枯れとサンゴの増殖に関しては、半ば途方に暮れていた状態であったこともあり、研究機関等との産後群集の調査とその先の持続可能利用を目指すプロジェクトには非常に協力的な対応をとっていただいている。
これらのことから、具体的な条例化には至れなかったものの、特にこの 1 年間で海辺の利用ルールと持続可能利用に向けて町の雰囲気の変化や連携の促進が実感できるものとなった。
2.事業全体の改善点
真鶴の海の持続可能とそれを実現させるための「海辺の利用ルール」の浸透に向けた町内の雰囲気は、かなり醸成されてきている。今後は、「海辺の利用ルール」具体的な展開とそれを基盤としたまちづくりの推進が必要であると考えられる。
3.改善点に関する要因と対策
次年度以降はミュージアムサポートの支援がなくなるが、当館が中心となり、協議会及び役場とともに自走する体制づくりが急務である。具体的なルールの展開を海辺で図るとともに、それを元にいかに役場としてまちづくりや海辺のゾーニング、観光客の受け入れ態勢を構築していくか、途切れることなく、今後も事業を推進していく必要がある。そのためにはこれまで通り定期的な協議会の開催とルールの周知等のアクションをはじめ、協議会から役場での対応への転換が必要となってくる。また、これらの事業に注目を集め、持続可能な海辺利用を図っていることを町のブランディングやまちづくりの目玉と位置付けてもらえるように、メディア等にも情報提供し、取り上げてもらえるような活動も必要である。

⑪

主催者　：アドベンチャーワールド

参加者数　：400,061 人

成果　：事業全体の成果として、活動を通じて白浜の海の環境課題について知るきっかけを提供し、地元住民の認識を深めることができた。また、白浜の海が抱える課題を地域住民自身の問題として認識し、具体的な行動変容を促すきっかけを作ることに成功した。さらに、中学生を中心に地元のダイバーや白浜町役場のみなさまと共に産卵床の制作及び設置に参加し、持続可能な環境回復活動を行う基盤を築くことができた。これにより、人と動物、自然の多様性と持続性を兼ね備えた海を次世代に継承する機会を提供できた。
　事業全体の改善点として、活動には一校一学年のみが参加しており、他の学校や地域の大人を含めた幅広い層の参加を促進することが必要である。また、学校への連絡や設置の準備においてスケジュールが遅れがちであったため、より計画的に事業を進めることの重要性が認識された。
　改善点に関する要因と対策として、持続的な活動の確保には地元自治体や学校との更なる協力を図り、持続可能なプログラムとして定着させるための協議を行うことが必要である。また、年間活動計画を策定し、事業の全体的な流

れとスケジュールを事前に計画し、各段階での準備と実施を適切に管理する。

(3)プログラム 2「海の博物館活動サポート」B コース博学連携活動への支援
(支援実施:4 団体 4 事業、参加者数合計:3,583 人)

①

主催者　: 国立極地研究所 南極 ・北極科学館

参加者数　: 260 人

成果　: 1.事業全体の成果
海の食物連鎖を学ぶ教材として、南極海の植物・動物プランクトンが大型であるとの利点を活かした、餌(植物プランクトン)と捕食者(動物プランクトンの消化管内容物)を直接観察できるプレパラート型樹脂標本を開発した。タブレットが主流になりつつある昨今の授業スタイルに合わせて電子版のブックレット(解説書)を PDF 形式で作成した。また小学生までの幅広い参加対象者のレベルに合わせるため、ルビ入りの電子版ブックレットも作成した。WiFi 搭載型のデジタル生物顕微鏡とタブレットを整備し、同じ標本の顕微鏡画像を複数名の参加者で共有でき、また各個人で画像撮影、サイズ測定、さらにはスケッチを自由に行うことができる教育環境を整えた。
2.事業全体の改善点
開発した観察ワークショップキットは幅広い授業テーマ、授業形態に対応できる環境を整備した。今後は、本キットを使用できる現場指導教員の育成と、幅広い分野を対象とした広報活動が課題となる。
3.改善点に関する要因と対策
教育現場や博物館といった組織との連携を図り、ニーズに合わせた仕様へのマイナーチェンジを継続する必要がある。本キットの貸出を継続するとともに、サイエンスカフェ、教員や学生対象の観察ワークショップを企画し、啓発活動を地道に行っていく。

②

主催者　: 公益財団法人しまね海洋館(島根県立しまね海洋館)

参加者数　: 717 人

成果　: 1.事業全体の成果
障がいや病気により、これまでの学習方法では十分な学習機会の確保が困難な児童・生徒に対し、ICT 技術を活用して体験的な学びを提供することができた。また、同世代の子どもたちと意見を述べ合う機会も少ないことから、今年度は「ICT を活用した学び合い」についての取組を進めることができた。さらに、遠隔地での一般向けプログラムとして試行し、海になじみのない人々にも海の学びを提供することができた。
2.事業全体の改善点
特別支援学校を対象にしたプログラムでは、児童・生徒が 1 人 1 端末で中継に参加した際のハウリングが課題となった。
一般向けオンラインプログラムでは、遠隔地のため広報が連携先に大きく依存することとなり、参加者確保が課題となった。また、遠方であることから事前の接続テストも連携先にゆだねる形となり、開催当日の電波状況不調などの問題が起きた。この点については連携を続けることで、連携先の経験値も上

がり、改善されていくものと思われる。
中継プログラム実施中は海洋館側では中継先の様子がわからず、待機時間が長いことが課題となった。中継以外の通信手段の確保と、実施プログラム全体構成の再考等で改善が図れると考えられる。
3.改善点に関する要因と対策
ハウリング対策として、イヤホン・マイクの使用で解決できる。ただ、学校側に整備されていない場合もあることから、機材数を確保する必要がある。電波状況不調については、連携を続けることで、連携先が確認すべき事項等の経験値も上がり、改善されていくものと思われる。また、機材の持ち込みも検討したい(端末数を増やす必要がある)。中継先の様子がわからないという課題については、中継以外の通信手段の確保と、実施プログラム全体構成の再考等で改善が図れると考えられる。

③

主催者　：真鶴町（真鶴町立遠藤貝類博物館）

参加者数　：2,467 人

成果　：1.事業全体の成果
　障がいや病気により、これまでの学習方法では十分な学習機会の確保が困難な児童・生徒に対し、ICT 技術を活用して体験的な学びを提供することができた。また、同世代の子どもたちと意見を述べ合う機会も少ないことから、今年度は「ICT を活用した学び合い」についての取組を進めることができた。さらに、遠隔地での一般向けプログラムとして試行し、海になじみのない人々にも海の学びを提供することができた。
2.事業全体の改善点
特別支援学校を対象にしたプログラムでは、児童・生徒が 1 人 1 端末で中継に参加した際のハウリングが課題となった。
一般向けオンラインプログラムでは、遠隔地のため広報が連携先に大きく依存することとなり、参加者確保が課題となった。また、遠方であることから事前の接続テストも連携先にゆだねる形となり、開催当日の電波状況不調などの問題が起きた。この点については連携を続けることで、連携先の経験値も上がり、改善されていくものと思われる。
中継プログラム実施中は海洋館側では中継先の様子がわからず、待機時間が長いことが課題となった。中継以外の通信手段の確保と、実施プログラム全体構成の再考等で改善が図れると考えられる。
3.改善点に関する要因と対策
ハウリング対策として、イヤホン・マイクの使用で解決できる。ただ、学校側に整備されていない場合もあることから、機材数を確保する必要がある。電波状況不調については、連携を続けることで、連携先が確認すべき事項等の経験値も上がり、改善されていくものと思われる。また、機材の持ち込みも検討したい(端末数を増やす必要がある)。中継先の様子がわからないという課題については、中継以外の通信手段の確保と、実施プログラム全体構成の再考等で改善が図れると考えられる。

④

主催者　：非営利活動法人あおもりみなとクラブ
（青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸）

参加者数　：139 人

成果　．1.事業全体の成果

・青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸を中心に発足した青森「海の学び」博物館連携活動プロジェクト運営協議会の、本格的なスタートから２年目を迎え、これまで以上に博学連携を強化し、青森市教育委員会の協力を得ながら、学校の教育現場に対して「海の学び」活動の機会と場を提
供することができた。

・地域市民、特に地域の次世代を担う子ども達や若い世代に対して、海をテーマにした生涯学習の推進を目的に、学校等の教育現場を介し、特に対象を児童、学生、若い世代とする事で地域社会を取り巻く状況・情勢を博物館ならではの視点から、正しい知識を楽しみながら知ってもらい、学んでもらう機会を創出することができた。

・当該協議会の活動を活発化する事で、青森市ならではの「博物館連携」及び「博学連携」のモデルケースを構築し、今後における学校と博物館との継続的な活動を目指すことができた。

2.事業全体の改善点

・活動プログラム①について、２０２５年度に開催される「青森港４００年」のご当地「C（Sea：海）級グルメ」の開発プロジェクトの、当初予定していたプログラムを中止・変更したことで、
学校教育現場との連携が出来なくなり、地域の次世代を担う若者が活動できる場を創出することができなかった。

・活動プログラム④について、体験活動の指導者が少なく、当初予定していた募集人数を減らさざるを得ない状況となった。

3.改善点に関する要因と対策

・今後継続するご当地「C（Sea：海）級グルメ」の開発に当たっては、活動プログラム②で連携した青森大学料理研究サークル等と連携することで、地域の次世代を担う若者への「海洋リテラシー」普及の機会の創出に繋げていきたい。

・学校向けの体験学習プログラムとすることで、教育現場との連携強化、次世代を担う学生との連携により、指導者不足の改善に繋げていきたい。

(4)プログラム 3「海の学び調査・研究サポート」への支援
（支援実施：5 団体 5 事業）

①

主催者　：宮崎県総合博物館

成果　：1.事業全体の成果

今回の調査研究により、これまであまり整理されていなかった宮崎県に生息するクラゲ・ウミウシ・サンゴ類の生態分布が明らかになってきた。とくに、ウミウシについては、現在も分類が不確定であり、宮崎県は南方系の種が生息していることから、新種の発見も大いに期待される。また、これらの生物の画像や動画等も収集することができた。今後の研究や展示で役立つものとなった。

調査研究したことを子どもたちに還元するための「ハンドブック」や「ワークシー

ト」製作ができた。製作だけでなく、実際に学校での授業支援をすることで、海の学びコーディネーターとしての役割を果たすことができた。さらに、子どもたちの海に対する疑問や調べてみたいことなどの興味・関心の高さを感じることができ、教科の学習支援や職業講話などの特別活動支援は、今後も継続したプログラムとして構築できる。

2.事業全体の改善点

もともと、私が教員籍である利点を生かし、学校との橋渡しとなりながらこのサポート事業を計画的に進めることができた。しかし、専任のミュージアム学芸員が同様の事業を実施するとすれば、学校側とミュージアム側との意識の違いや教員による温度差を感じてスムーズな連携が難しいと感じた。しかしながら、学校現場の教員は、非常に協力的であり、子どもたちのためになるのであれば努力も惜しまないため、よりよい博学連携のため、ミュージアム側が誠意をもって「海の学び」を伝えようとする姿勢が一番の原動力となると感じる。

3.改善点に関する要因と対策

学校現場へウミウシなどの貸出し用の飼育水槽を設置したことは、効果が大きかった。授業支援と並行して、気軽で、負担をかけずに学校と連携できるプログラム作りを行っていきたい。また、職業講話などの授業支援も大変効果的であった（とくに中学校）。博学連携の観点からも、今後も継続して実施していくことが大きな突破口になると考える。

②

主催者　：余市町教育委員会（余市水産博物館）

成果　：1.事業全体の成果

本調査事業により、宮城学院女子大学所蔵史料の目録の作成が完了し、余市水産博物館所蔵分の調査も実施することができた。

併せて、これらの調査成果を含んだ4つのテーマのアウトリーチ教材を用いた学習プログラムの構築を行うことができた。

2.事業全体の改善点

今後は、学校と協働し、これらのテーマについて子供達が対話による深い学びが得られるよう更なるプログラムの検討及びプロトタイプの製作が求められる。

3.改善点に関する要因と対策

本事業は、調査研究内容から必要事項を抽出し、学習プログラム製作の一助にするものであり、調査研究を実施したのちに学習プログラムの検討を行った。そのため、学習プログラム自体の構築について深めることが叶わなかった。対策としては、学校と協働して学習プログラム素案を作成し、その上で調査研究を進めるプロセスも必要であったと考える。

そのため、2024年度は、これらの内容について学校と協働し、学校利用しやすいよう内容を詰めていくと同時にこれらの調査成果をもとにより「海の歴史」について学習できる動画や教育補助教材を盛り込んだトランクキットの製作を行いたい。

③

主催者　：ミュージアムパーク茨城県自然博物館

成果　：1.事業全体の成果

（1）地域の海岸動物の画像等の収集・整理
ガイドブックの製作に向けた茨城の海産動物の画像の収集・整理を通して、新たに 50 点以上の磯の動物の画像を撮影し、それらを動物群ごとに整理し、クラウドによって関係者間で共有した。これらの素材は、「茨城の磯の動物ガイド」での使用はもちろん、今後、博物館や水族館等の関係機関が、海に係わる展示や海洋教育の教材作りをする際にも活用していきたい。また、合わせてウミウシ等の海岸動物の標本を収集し、博物館に保管した。今後、これらの標本は地元の海岸動物相の解明やその変化を知るのに役立てるだけでなく、博物館の展示や教育普及でも活用していく予定である。
（2）地域の関連機関等と協働した磯の動物の観察会の実施
海岸動物学習プログラムの運用に向けた課題を知るため、アクアワールド茨城県大洗水族館、公益財団法人 水産無脊椎動物研究所、地球レーベルと連携し、2023 年 5 月 20 日、5 月 21 日、6 月 17 日にひたちなか市で磯の動物の観察会を試行的に実施した（参加者は 86 名）。観察会ごとに参加対象者を変えて実施したが、世代によって海やそこに生息する生きものに対する感じ方や行動に違いがあり、年齢層に合わせた効果的な観察や解説のしかたを学ぶことができた。また、観察会で得られたことを作成中のガイドブック PDF 版の内容に反映させることができた。さらに、地域の関連機関や団体等と協働して開催することにより、機関・団体間の連携体制が確実なものとすることができた。
（3）「茨城の磯の動物ガイド」PDF 版の作成
メールでのやりとりの他、対面やオンラインで編集会議を開催しながら、「茨城の磯の動物ガイド」の PDF 版を作成した。総頁数は 111 頁で、海綿、刺胞、扁形、軟体、環形、節足、苔虫、棘皮、脊索の 9 つの動物門の中から代表的な動物約 120 種を掲載している他、観察会のための基礎知識、観察会に向けての準備や注意、コラムなどを盛り込んでいる。今後、ガイドブックの冊子の作成を予定しているが、冊子が完成した際には、博物館や水族館、関係団体で開催される自然観察会等の教育普及活動を通し、多くの人々に地元の海やそこに生息する生きものについての関心や理解を深める機会を提供することができるのではないかと考えている。
2.事業全体の改善点
当初予定していた活動をほぼ実施することができたが、観察会の内容については改善の余地があると考えている。
3.改善点に関する要因と対策
観察会を実際に開催して、これまで気付かなかったことが多々あった。今後、これらの経験を踏まえ、関係者間で綿密な打合せを行い、観察会の進め方や海岸動物学習プログラムの活用方法を詳細に検討していく必要がある。

④

主催者　：萩博物館(萩博物館特別展・企画展開催実行委員会)

成果　：1.事業全体の成果
2024 海の妖怪展で一般向けに展示紹介する意義のある珍魚・怪魚（特記的生物）の選定・整理・標本制作を、目標数を上回り 122 点ほど認識・制作することができ、2024 年海の妖怪展の後半の郷土の海の環境異変を特集するコーナーの実現の目途がついた。学校の生徒に珍魚・怪魚や海の異変をモチーフに現代版の妖怪画を創作してもらうことについては、当初は難易度の高さや意図の伝わりにくさを懸念したが、連携してくださった方々の的確な対応と熱意や機転、生徒の意欲・理解・興味関心の予想以上の高さにより、目標を上回る

11 枚の妖怪画の創作に成功した。これにより、2024 海の妖怪展の重要なポイントである「海への畏怖の念」を再起させるための具体的な取り組みの目途がついた。総じて、2024 海の妖怪展の物理的な準備と構想の推進を実現できた。

2.事業全体の改善点

上記のように奏功した面が多かったものの、珍魚・怪魚（特記的生物）の出現と海洋環境変化の因果関係については、連携機関と論議した中では、必ずしも関連づけや対応が見いだせない例もあること、継続して研究や考察が必要であることも明らかになった。また、学校の生徒による海の異変をモチーフとした妖怪画の創作のために制作したワークシートは、スタッフや教師の助言や支援があって使いこなせた面もあるため、生徒自身や 2024 海の妖怪展の付帯事業、理科学習・郷土学習で活用できるようにするには改良を要する。

3.改善点に関する要因と対策

特記的生物と海洋環境変化の因果関係については、2024 海の妖怪展では無理な関連づけを行わず、異変や現象を大まかに分類し、可能性のある要因を示しつつ、各カテゴリーに該当しうる生物を割り当てるなど、誤解のない紹介方法を工夫する。ワークシートについては、海の異変の認識、それをモチーフとした妖怪の着想、ストーリー設定などのステップをさらに細分化し、平易な言葉で記すなど、一般の親子の用に応えられるよう調整する。また、今回は学校の先生方との意見交換や調整のための時間が限られていたため、早期から十分な時間をとって協議し、理科学習や郷土学習のニーズも聞きながら実効力のあるシートの制作に挑みたい。

⑤

主催者　：奄美海洋展示館（㈱谷木材商行　大浜営業所）

成果　：1.事業全体の成果

大浜海岸でのサンゴ礁の健康度を調査し過去と現在と比較し移り変わりを展示を通して伝えた。

水族館での稚サンゴ育成の基礎的研究の環境整備し次年度へ向けた本格的な研究、実験への移行する事ができた。

サンゴについての教育プログラム（ワークシート、勉強会）の構築しワークシート（計 112 枚）回収勉強会（計 5 回）を実施し主に小学生以下の子どもとその親に基礎的なサンゴの生態とサンゴ礁への理解、人間との関わりについての学びを提供した。

シンポジウムにおいてブース出展し高校生以上を対象にサンゴの現状と活動内容を報告。意見交換、を通して環境教育、保護活動について考えるきっかけ作りを行なった。

全ての来館者を対象にサンゴの生態、現状、活動についてパネル展示の作製と生体展示水槽の設置。

2.事業全体の改善点

着底実験の失敗を踏まえ方法の改善

調査内容、方法、活動記録が定型的でやや見づらいので明瞭化する

教育普及活動が島内や来館者のみでとどまっているのでよりグローバルにフリーで閲覧できるようにする

3.改善点に関する要因と対策

着底サイクルを理解し、実験方法を再検討する

サンゴの種別に産卵周期、タイミングを調べ採卵方法も改めてより状態の良い

サンプルを得る
現地研究者の協力を得て共同で調査、実験を行う
調査内容、方法、活動記録をまとめて見やすいフォーマットを作成し張り出しを行う
ワークシートを画像化し配布する、勉強会をオンラインで同時配信する

(5)「海の学び特別サポートプログラム」への支援
(支援実施:0 団体 0 事業、参加者数合計:0 人)

10. 事業成果物:

Ⅰ. 事務局

製作物	・2023 年度プログラム 1「海の企画展サポート」支援実施ガイドブック (データ):77 ページ ・2023 年度プログラム 2「海の博物館活動サポート」 A コース支援実施ガイドブック(データ):71 ページ ・2023 年度プログラム 2「海の博物館活動サポート」 B コース支援実施ガイドブック(データ):71 ページ ・2023 年度プログラム 3「海の学び調査・研究サポート」 支援実施ガイドブック(データ):62 ページ ・2023 年度「海の学特別サポートプログラム」 支援実施ガイドブック(データ):72 ページ
印刷物	・2023 年度「海の学びミュージアムサポート」事業案内チラシ: A4版 3,600 枚 ・2023 年度「海の学びミュージアムサポート」公募案内文書発送用封筒: 角2サイズ 1,200 枚 ・2023 年度「海の学びミュージアムサポート」事業案内チラシ増刷: A4版 100 枚 ・2023 年度「海の学びミュージアムサポート」事業再公募案内チラシ: A4版 4,200 枚 ・2023 年度「海の学びミュージアムサポート」公募案内文書発送用封筒(追加): 角2サイズ 1,700 枚

Ⅱ.「海の企画展サポート」支援館
(1)蘭越町貝の館

製作物	・プラスチックアナライザー(FTIR)一式・水産資源の管理解説パネル ・エネルギー分散型蛍光X線分析装置 EDX－8100・外来種解説パネル
印刷物	・企画展チラシ 2,000 枚

(2)ふくしま海洋科学館

製作物	なし
印刷物	①チラシ 企画展飼育員すばる君のひみつ道具 25,000 枚 ②チラシ 夏休みイベント 30,000 枚 ③チラシ なりきり飼育員・飼育員なんでも相談会 200 枚 ④チラシ 化石と生きた化石のびっくり話 200 枚 ⑤チラシ 深海調査のひみつ大公開 200 枚

	⑥チラシ　アクアマリンのお正月　　30,000 枚 ⑦ワークシートひみつ道具クイズ　300 枚 ⑧ワークシートひみつ道具クイズ　300 枚 ⑨ポスター　企画展飼育員すばる君のひみつ道具　200 枚 ⑩トレーディングカード　7 種 ⑪化石と生きた化石クリアファイル　100 枚

(3)千葉県立美術館

製作物	①ティザー動画(Youtube 用広報宣伝動画)(30 秒/2023 年7月 24 日公開)
印刷物	①ポスター　600 枚 ②チラシ　30000 枚 ③入場券　23000 枚(一般 15000 枚、高大入場券 3000 枚、団体 4000 枚、招待券 1000 枚) ④案内状　300 枚 ⑤案内状封筒　300 枚 ⑥小冊子　500 部 ⑦解説リーフレット 5000 枚

(4)新潟市水族館 マリンピア日本海

製作物	なし
印刷物	①「もっと詳しく魚の色」リーフレット　配布数 20,000 部 ②「ワークシート いろいろないきものを探そう！」 配布数 10,000 部 ③「ワークシート 海を流れるゴミ」 配布数 10,000 部

(5)豊橋市自然史博物館

製作物	①特別企画展案内看板類 ②展示解説パネル ③ヒゲクジラ生体復元人形 ④海獣類骨格 3D 模型 ⑤実体顕微鏡 ⑥デジタル顕微鏡 ⑦耳小骨模型
印刷物	①チラシ　(A4)　100,000 枚 ②ポスター(B2)　2,000 枚 ③招待券　2,000 枚 ④特別企画展展示解説書(A4、56p)　700 部

(6)鳥羽市立海の博物館

製作物	①会場誘導用看板　3 枚 ②エビ網さばき(漁獲物の取り外し・絡まりの修繕等)場面のジオラマ　一式 ③志摩市浜島町の伊勢エビ型看板ミニチュア　1 点 ③伊勢エビ料理・伊勢神宮神饌模型　5 点 ④そのほか展示解説用パネル　30 枚
印刷物	①展示ポスター　500 枚 ②展示チラシ　10000 枚 ③展示解説するパンフレット　1000 部 ④展示ワークシート(3 種類)　各 800 枚　計 2400 枚

	⑤付帯事業④にて使用するワークシート　14 枚

(7)斎宮歴史博物館

製作物	①展示室入口タペストリー　1 点
印刷物	①チラシ　30,000 部 ②ポスター　1,000 部 ③図録　650 部 ④観覧券(カラー)　5,000 部 ⑤招待券　1,000 部

(8)尼崎市総合文化センター

製作物	①長嶋祐成氏インタビュー動画（会期中に配信）
印刷物	①広報物　ポスター(500 部)、チラシ(43,000 部) ②教育資料　海の学び副読本(23,000 部)、重ね押しスタンプラリー(5,000 部) ③記録物　展覧会図録(600 部)

(9)愛媛県総合科学博物館

製作物	①来島海峡ジオラマ模型映像システム(来島海峡航路航法解説模型)　1 点 ②ジオラマ模型(中渡島潮流信号所・中渡島全景各1点)　計 2 点
印刷物	①「来島海峡と潮流信号所」チラシ:35,000 枚、　ポスター:820 枚 ②「来島海峡と潮流信号所」関連イベントチラシ 5,000 枚 ③「来島海峡と潮流信号所」ワークシート　　2,000 枚

(10)宮崎県総合博物館

製作物	①魚介類模型(19 点) ②海藻アクリル封入標本(27 点) ③海の恵み郷土料理(11 点) ④特別展用キャラクター(9 種類) ⑤看板　(9 枚)
印刷物	①チラシ　10 万枚 ②ポスター　400 枚 ③行事案内(みやはく通信)　13 万枚 ④ガイドブック　500 冊

(11)沖縄県立博物館・美術館

製作物	(後期) 屋内外ターポリン(2 枚)、屋外懸垂幕(1枚)、 会場内懸垂幕(6 枚)、デジタル映像(1 点)
印刷物	(前期) チラシ(30,000 部)、ポスター(1,000 部)、チケット(2,000 部)、展示図録(300 部)、関連シンポジウム用冊子(250 部) (後期) チラシ(30,000 部)、ポスター(1,200 部)、チケット(2,000 枚)、展示図録(500 部)、ワークシート(大人用 300 部、子ども用 300 部)

(12)国立科学博物館

製作物	①展示パネル(17 点) ②プロジェクター投影用デザイン(1 点)

	③ウミウシのフィギュア（6 点） ④ウミウシの展示ケース（1 点） ⑤クラゲ標本の展示ケース（1 点） ⑥ムラサキイガイの標本固定備品（1 式）
印刷物	①・ポスター　（B2 サイズ　100 部） ②チラシ　　（A4 サイズ　65,000 部） ③パンフレット（A4 見開き　22,000 部）

Ⅲ.「海の博物館活動サポート」A コース博物館活動支援館

（1）瀬戸内海歴史民俗資料館

製作物	①連続セミナー紹介パネル
印刷物	①開館50周年記念事業チラシ　2,000 枚（年間事業周知） ②連続セミナー記録冊子　1,000 部 ③そらあみチラシ　2,000 部 ④網解説シート　2,000 部 ⑤ナイトミュージアムチラシ　1,000 枚 ⑥シンポジウムチラシ　2,000 枚 ⑦連続セミナー第３・４回チラシ　200 枚（館内印刷） ⑧連続セミナー第５回チラシ　200 枚（館内印刷）

（2）和歌山県立自然博物館

製作物	①活動内容③にて活用した生息環境ごとのカニ類標本の教材パッケージ（8 箱） ②活動内容④にて活用したカニ類標本の教材パッケージ ③活動内容⑤にて活用した生息環境ごとにまとめたカニ類標本の教材パッケージ ④大型のカニ標本を収納するための木製標本箱（3 点） ⑤作製した標本展示台（25 点）
印刷物	①ワークシート・干潟の生物観察会①（添付） ②ワークシート・干潟の生物観察会②（添付） ③ワークシート・磯の生物観察会（添付） ④ワークシート・ゆかし潟の生物観察（添付） ⑤ポスター2 種・「さがしてみよう！和歌山の身近なカニ」「くらべてみよう！沖縄と和歌山のカニ」（添付）

（3）青森県営浅虫水族館

製作物	①稚魚展示用水槽設備　5 組製作 ②稚魚水槽コーナー化粧パネル製作
印刷物	なし

（4）瑞浪市化石博物館

製作物	①パレオパラドキシア産状レプリカ展示台　1 台 ②パレオパラドキシア解説パネル 5 枚
印刷物	①講演会資料（6 月 23 日実施分）、50 部 ②講演会資料（9 月 9 日、9 月 10 日実施分）50 部 ③パレオパラドキシアが見たみずなみのうみべ　4,000 冊

（5）北海道立オホーツク流氷科学センター

製作物	なし

印刷物	・砕氷船によるプランクトン採集、顕微鏡観察ワークショップチラシ 1,300 枚、ポスター15 枚 ・クリオネ工作、環境講演会などのワークショップ　チラシ 1,000 枚、ポスター15 枚

(6)長崎市恐竜博物館

製作物	①地域の海洋生物をテーマに海の生き物や環境を学ぶプログラム 【活動名：のもざき磯遊び講座】 ・缶バッジ ・ユニホーム(デザイン法被)40 着 【活動名：タコとエビの生態観察】 ・生態展示用水槽一式 2 台 ・生態展示用水槽一式 1 台 ・解説パネル 1 枚
印刷物	①ポスター　(A1、カラー、30 部) ②チラシ　　(A4、片面、カラー、2,000 部) ③タコやエビなどの野母崎の海洋生物の調べ学習(夏休みの自由 研究)を促すワークシート(A4、500 部)

(7)新江ノ島水族館

製作物	VR プログラム(従来のものをオンライン化、今後もイベント等で活用)
印刷物	Bistro えのすい～ふじさわサステイナブルレストラン～　冊子 100 部

(8) 結 creation

製作物	・水系貝類調査標本(92 点×3 セット)
印刷物	・水系貝類調査報告書　400 部

(9)重富海岸自然ふれあい館なぎさミュージアム

製作物	・重富ユニバーサルビーチ活動紹介パネル(A1 判：カラー印刷))3 部
印刷物	・ユニバーサルビーチ　研修会チラシ(A4判：カラー印刷)50 部 ・重富ユニバーサルビーチ体験会　チラシ(A4判：カラー印刷)1,000 部 ・重富ユニバーサルビーチ報告会・体験会チラシ(A4判：カラー印刷)500 部 ・重富ユニバーサルビーチ活動紹介パンフレット(A4 三つ折り：カラー印刷)400 部

(10) 鴨川シーワールド

製作物	・レクチャー「謎多き深海の生き物たい」(タイトルのみ) ・ラブカ、ミツクリザメ全身骨格標本 ・ラブカ、ミツクリザメ全身標本 ・シラスのプラスティネーション(商品名：プラスティモンスター)
印刷物	・レクチャー告知看板　各 2 枚(時間ちがい)

(11) 真鶴町立遠藤貝類博物館

製作物	・真鶴の海辺の基本的考え方 ・海辺の利用ルール制定に向けた取組やこれまでの活動に関するパネル作成 VR プログラム(従来のものをオンライン化、今後もイベント等で活用)
印刷物	・真鶴の海の環境等に関する包括的冊子(A4 サイズ 8p 5,000 部) ・町民向け講演会「海まちラボ 海トーク」チラシ(A4 サイズ 1,000 枚) ・海の課題と持続可能利用に関するシンポジウムチラシ(A4 サイズ 1,000 枚)

	・町外向けイベント「海まちラボ海さんぽ」チラシ（A4 サイズ 3,000 枚×2 回） ・海の遊びかたリーフレット（A4 サイズ 5,000 枚）

(12)アドベンチャーワールド

製作物	パンダバンブーアオリイカ産卵床の活動に関するパネルの展示
印刷物	なし

Ⅳ.「海の博物館活動サポート」B コース博学連携支援館

（1）国立極地研究所　南極・北極科学館

製作物	・ブックレット（解説書）、500 部
印刷物	・電子版ブックレットルビ入り版、ルビなし版 ・プレパラート標本観察マニュアル ・スケッチ用付箋、500 部

（2）島根県立しまね海洋館

製作物	なし
印刷物	1．いわみん首都圏版　1,500 部 2．いわみん 2023 秋　ガイドブック　15,000 部

（3）真鶴町立遠藤貝類博物館

製作物	① 学校配布用 海洋生物の画像・動画データ（200 点） ② 海の環境問題や海洋プラスチックに関するパネル展示物（A1 サイズ×1 枚）
印刷物	① プランクトン観察シート（A4 サイズ 1,000 枚） ② 館内見学用ワークシート（A4 サイズ 1,000 枚×2 種類）

(4)青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

製作物	なし
印刷物	①アマモによる紙づくりのマニュアル（2022 年度事業成果物）の印刷（30 部）

Ⅴ.「海の学び調査・研究サポート」支援館

（1）宮崎県総合博物館

製作物	①クラゲ飼育用アクリル水槽　1セット
印刷物	①ハンドブック1種　計 100 冊 ②ワークシート 3 種（クラゲ・ウミウシ・サンゴ類）　計 450 枚

（2）余市水産博物館

製作物	①『余市水産博物館研究報告』
印刷物	なし

（3）ミュージアムパーク茨城県自然博物館

製作物	①「磯の動物ガイドブック」PDF 版1種 ②「磯の動物ビンゴ」1 種
印刷物	なし

(4)萩博物館

製作物	・萩光塩学院高等学校生徒による妖怪画:11 枚 ・海の異変をモチーフに妖怪画を創作するためのワークシート:4 枚
印刷物	なし

(5)奄美海洋展示館

製作物	なし
印刷物	サンゴについての解説板、ワークシート

Ⅵ.「海の学び特別サポートプログラム」支援館

【参考】事業費一覧

（1）プログラム 1「海の企画展サポート」（72,500,000 円）

No.	地域	開催博物館（主体）	開催テーマ	開催期間	当初事業費総額 決算事業費総額	当初支援金額 支援確定金額
1	北海道	蘭越町貝の館（蘭越町）	地球の限界を超えた海洋プラスチックゴミ　～その正体を探る～	2023年7月1日～2023年10月31日	14,780,000	10,460,000
					14,504,380	10,460,000
2	福島県	ふくしま海洋科学館（ふくしま海洋科学館公益財団法人）	企画展「飼育員すばる君のひみつ道具」	2023年7月15日～2024年2月29日 ※なお、2024年3月1日～2024年9月1日は自主事業として継続実施	8,068,000	5,800,000
					8,537,139	5,800,000
3	千葉県	千葉県立美術館	千葉県政 150 周年記念事業　房総の海をめぐる光と影とアート展	2023 年7月 19 日～2023 年 9 月 18 日	10,499,000	2,000,000
					8,818,086	2,000,000
4	新潟県	新潟市水族館マリンピア日本海（公益財団法人新潟市海洋河川文化財団）	魚の色	2023 年 7 月 14 日～2024 年 2 月 25 日	28,460,000	9,160,000
					26,127,477	9,160,000
5	愛知県	豊橋市自然史博物館（豊橋市）	第 37 回特別企画展「カイジュウ博 2023－海で暮らす仲間たち－」	2023 年 7 月 14 日～2023 年 9 月 3 日	14,208,000	6,810,000
					11,820,772	6,810,000
6	三重県	鳥羽市立海の博物館（公益財団法人東海水産科学協会）	特別展「三重県のさかな伊勢エビ」	2023 年 7 月 15 日～2023 年 11 月 23 日	1,600,000	1,280,000
					1,611,365	1,280,000
7	三重県	斎宮歴史博物館	特別展「海の祈り－海浜の神社と伊勢神宮－」	2023 年 10 月 7 日～ 2023 年 11 月 26 日	4,345,000	2,500,000
					4,606,159	2,500,000
8	兵庫県	尼崎市総合文化センター（公益財団法人尼崎市文化振興財団）	「魚へのまなざし ―長嶋祐成と大野麥風―」	2023 年 5 月 27 日～2023 年 7 月 2 日	7,109,000	4,950,000
					7,422,074	4,950,000
9	愛媛県	愛媛県総合科学博物館	企画展「来島海峡と潮流信号所」	2023 年 10 月 14 日～2023 年 11 月 26 日	7,878,000	6,300,000
					7,882,059	6,300,000
10	宮崎県	宮崎県総合博物館	特別展「黒潮はくぶつかん～日向灘から琉球列島の生きものと海の恵み～	2023 年 10 月 14 日～2023 年 11 月 26 日	11,830,000	6,770,000
					8,707,226	6,770,000
11	沖縄県	沖縄県立博物館・美術館	連続展示: 海を越える人々 前期:琉球と倭寇のもの語り 後期:旧石器時代の人類-海を越えた最初の人々-	前期:2023 年 9 月 22 日～ 2023 年 11 月 19 日 後期:2023 年 12 月 12 日～2024 年 2 月 12 日	22,757,000	7,720,000
					10,006,728	7,720,000
12	東京都	国立科学博物館（独立行政法人 国立科学博物館）	企画展「知られざる海生無脊椎動物の世界」	2024 年 3 月 12 日～2024 年 6 月 16 日	14,637,000	8,750,000
					14,713,325	8,750,000

(2)プログラム 2「海の博物館活動サポート」Aコース博物館活動(27,040,364)円)

No.	地域	開催博物館 (主体)	開催テーマ	実施期間	当初事業費総額 決算事業費総額	当初支援金額 支援確定金額
1	香川県	瀬戸内海歴史民俗資料館(香川県立ミュージアム)	瀬戸内海歴史民俗資料館開館50周年記念事業 れきみんで瀬戸内海を学ぶ	2023 年 4 月 15 日～2023 年 11 月 26 日	3,000,000	3,000,000
					2,187,445	2,187,445
2	和歌山県	和歌山県立自然博物館	様々な標本を通して海を学ぼう！カニ類を用いた水辺環境の学習プログラムの開発と実践	2023 年 4 月 17 日～2024 年 3 月 31 日	629,000	620,000
					636628	620,000
3	青森県	青森県営浅虫水族館	未来へつなぐ大切な命	2023 年 7 月 22 日～2024 年 3 月 31 日	3,014,000	3,000,000
					3,067,915	3,000,000
4	岐阜県	瑞浪市化石博物館 (瑞浪市教育委員会スポーツ文化課)	パレオパラドキシアが見たみずなみのうみべ―化石から学ぶみずなみが海だったころ―	2023 年 5 月 4 日～2024 年 3 月 31 日	1,148,000	1,140,000
					1,123,430	1,123,430
5	北海道	北海道立オホーツク流氷科学センター	動くキャンパス　ガリンコ号 III で学ぶオホーツク海の魅力	2023 年 6 月 1 日～2024 年 4 年 30 日	3,098,000	3,000,000
					3,048,272	3,000,000
6	長崎県	長崎市恐竜博物館 (一般社団法人野母崎産業活性化協会)	『シーボルト来日200周年記念イベント 「タコとエビとシーボルト」』	2023 年 5 月 28 日～2023 年 9 月 30 日	2,870,000	2,870,000
					2,592,504	2,592,504
7	神奈川県	新江ノ島水族館(株式会社新江ノ島水族館)	水族館と異分野の融合で目指す新たな海の学びの創出	2023 年 5 月 1 日～2024 年 3 月 31 日	4,000,000	3,000,000
					4,420,000	3,000,000
8	兵庫県	きしわだ自然資料館 (結 creation)	茅渟の海と鳩の湖・なかをとりもつ淀川の流れ	2023 年 5 月 13 日～2024 年 3 月 31 日	2,415,000	2,410,000
					2,610,000	2,410,000
9	鹿児島県	重富海岸自然ふれあい館　なぎさミュージアム(特定非営利活動法人　くすの木自然館)	「海の体験学習」ユニバーサル化基盤整備事業	2023 年 6 月 1 日～2024 年 2 月 29 日	2,610,000	2,610,000
					2,619,627	2,610,000
10	千葉県	鴨川シーワールド	世界初となるラブカ・ミツクリザメの全身骨格標本を用いた動物レクチャーの運	2023 年 9 月 30 日～2024 年 3 月 24 日	3,000,000	3,000,000
					3,000,000	3,000,000
11	神奈川県	真鶴町立遠藤貝類博物館 (真鶴町)	「海の学び」からはじめる持続可能地域を目指したソーシャルイノベーション	2023 年 5 月 15 日～2024 年 3 月 31 日	3,000,000	3,000,000
					2,756,985	2,756,985
12	和歌山県	株式会社アワーズアドベンチャーワールド()	パンダが食べ残した竹で製作する「アオリイカ産卵床」	2023 年 6 月 14 日～2024 年 3 月 31 日	744,000	740,000
					747,880	740,000

(3)プログラム 2「海の博物館活動サポート」B コース博学連携活動(8,532,118 円)

No.	地域	開催博物館 (主体)	開催テーマ	実施期間	当初事業費総額 決算事業費総額	当初支援金額 支援確定金額
1	東京都	国立極地研究所 南極・北極科学館	南極海洋プランクトン樹脂封入標本観察ワークショップキット No.2の開発と試用	2023 年 5 月 29 日～2024 年 3 月 29 日	3,000,000	3,000,000
					3,000,000	3,000,000
2	島根県	公益財団法人しまね海洋館(島根県立しまね海洋館)	ICTでもっとつなごう特別支援学校と海・水族館	2023 年 4 月 1 日～2023 年 12 月 31 日	3,410,000	2,500,000
					2,508,393	2,500,000
3	神奈川県	真鶴町立遠藤貝類博物館 (真鶴町)	海辺から支える学校教育での 「海の学び」	2023 年 5 月 15 日～2024 年 3 月 31 日	3,850,000	2,000,000
					4,237,796	2,000,000
4	青森県	青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸(非営利活動法人あおもりみなとクラブ)	博学連携による次世代育成プロジェクト	2023 年 6 月 1 日～2024 年 9 年 29 日	1,890,000	1,870,000
					1,032,118	1,032,118

(4)プログラム 3「海の学び調査・研究サポート」(2,409,267 円)

No.	地域	開催博物館 (主体)	開催テーマ	実施期間	当初事業費総額 決算事業費総額	当初支援金額 支援確定金額
1	宮崎県	宮崎県総合博物館	宮崎県周辺海域におけるクラゲ・ウミウシ・サンゴ類の分布及び生態と環境保全教育プログラムの構築	2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日	506,000	500,000
					537,932	500,000
2	北海道	余市水産博物館 (余市町教育委員会)	余市湾を中心とした「海の歴史」学習プログラムの構築に係る基礎的研究―「林家文書」からみるヨイチ場所における近世場所請負制度の様相―	2023 年 4 月 1 日～2024 年 4 月 26 日	510,000	500,000
					498,382	498,382
3	茨城県	ミュージアムパーク茨城県自然博物館	地域の関係機関等と協働した海岸動物学習プログラム作成と運用に向けた具体的取り組み	2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日	513,000	500,000
					460,885	460,885
4	山口県	萩博物館 (萩博物館特別展・企画展開催実行委員会) ―	山口県日本海の特記的生物に基づく現代版「妖怪」の創作 ～萩博物館2024海の妖怪展に向けて～	2023 年.5 月 1 日～2024 年 3 月 31 日	500,000	500,000
					500,000	500,000
5	鹿児島県	奄美海洋展示館 (㈱谷木材商行　大浜営業所)	水族館での教育プログラムへの活用に向けたサンゴ胚用いた育成計画と着生調査	2023 年.5 月 12 日～2024 年 3 月 31 日	470,000	450,000
					473,126	450,000

(5)「海の学び特別サポートプログラム」(0 円)

No.	地域	開催博物館（主体）	開催テーマ	実施期間	当初事業費総額 決算事業費総額	当初支援金額 支援確定金額
		無し				

1.支援費（小計：110,481,749 円）
2.事務局経費、他（23,137,554 円）
3.事業費合計（133,619,303 円）